

発掘調査報告 第38集

橋梁整備事業 市道古田切本線
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査

いな むら じょう あと
稻 村 城 跡

1999. 2

駒ヶ根市

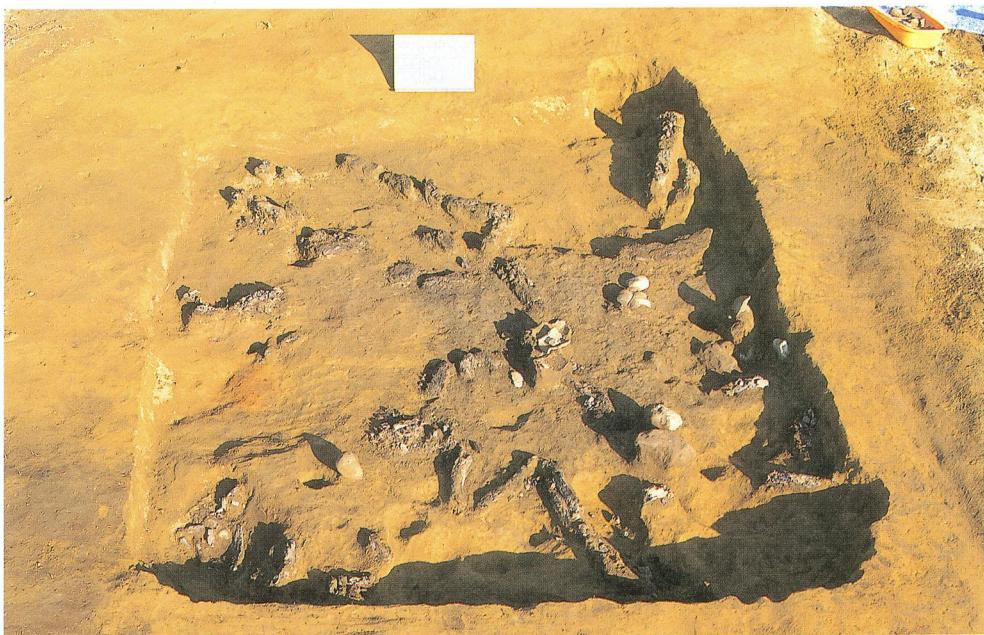
駒ヶ根市教育委員会



遺跡遠景（遊光城から）



調査状況（東から）



小堅穴跡



土壤 1

例 言

1. この報告書は、駒ヶ根市が実施する橋梁整備事業 市道古田切本線に伴う、平成10年度 稲村城跡発掘調査の報告である。
2. 本報告書は本文・図の後に写真図版をまとめて編集し、報告書抄録は最後に掲載してある。
3. 現場での遺構測量は北澤武志、宮崎啓子、北澤雄喜、竹村章子が行い、製図は氣賀澤進、湯沢啓子、北澤(武)が行った。遺物の実測は北澤(武)が行い、拓影図は湯沢が担当し、製図は北澤(武)が行った。現場での写真撮影は北澤(武)が行い、遺物の撮影は友野良一、北澤(武)があたった。
4. 本報告書の執筆、編集は北澤が行い、友野良一、氣賀澤進が監修した。
5. 遺物及び実測図等の調査に伴う関係資料は、駒ヶ根市立博物館（長野県駒ヶ根市上穂栄町23番1号）に保管してある。

目 次

例 言 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 発掘調査の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	5
第1節 位置及び地形・地質	5
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 発掘調査	7
第1節 調査概要	7
第2節 遺構・遺物	8
1. 第1号住居址	8
2. 第2号住居址	8
3. 第3号住居址	9
4. 第4号住居址	9
5. 第5号住居址	9
6. 第6号住居址	10
7. 第6号住居址覆土中ピット	10
8. 小豎穴址	11
9. 土 壤	11
10. 小 溝 址	12
11. ②区南西隅落ち込み	12
12. ③区豎穴	13
13. 焼土ピット	13
14. 特殊遺構	13
15. 3 の 堀	13
16. 通 路	14
17. 柱 穴	15
第Ⅳ章 おわりに	16
陶器及び須恵器一覧表	18
図 版 (図・写真)	
抄 錄	

図 目 次

第1図 稲村城跡位置図	1 9
第2図 稲村城跡周辺遺跡位置図	2 0
第3図 稲村城跡調査区位置図	2 1
第4図 ②区西部遺構全体図	2 2
第5図 ②区中央部・東部遺構全体図	2 3
第6図 ③区遺構全体図	2 5
第7図 第1号住居址実測図	2 7
第8図 第2号 " "	2 7
第9図 第3号住居址・第4号住居炉址実測図	2 8
第10図 第5号住居址実測図	2 8
第11図 第6号 " "	2 9
第12図 小豎穴址実測図	3 0
第13図 土壙1~12実測図	3 1
第14図 土壙13~24 "	3 2
第15図 土壙25~27・③区豎穴・焼土ピット・特殊遺構実測図	3 3
第16図 3の堀・通路実測図	3 5
第17図 第1号住居址出土遺物	3 7
第18図 第2号 " "	3 7
第19図 第3号 " "	3 8
第20図 第5号 " "	3 8
第21図 第6号住居址及び覆土中ピット出土遺物	3 9
第22図 小豎穴址出土遺物	4 0
第23図 土壙1出土遺物	4 1
第24図 繩文時代早期末~前期初頭土器	4 1
第25図 土壙4・6出土遺物	4 2
第26図 土壙8出土遺物	4 3
第27図 土壙9 "	4 3
第28図 土壙10出土遺物1	4 3
第29図 土壙10 " 2	4 4
第30図 土壙11出土遺物1	4 4
第31図 土壙11 " 2	4 5
第32図 土壙14~18出土遺物	4 5
第33図 土壙19出土遺物	4 5
第34図 土壙出土大型石器	4 6
第35図 3の堀出土遺物	4 7
第36図 通路部溝出土遺物	4 7
第37図 " 石積み出土遺物	4 7
第38図 " 水路その他出土遺物	4 8
第39図 ピット出土遺物	4 9
第40図 土壙8・③区豎穴出土遺物	4 9
第41図 グリッド等出土遺物	4 9

写 真 目 次

- 写真1 (1. 2. 遺跡遠景)
- 写真2 (1. 2の堀東土墨付近、2. ②区調査前、3. 農道試掘トレーニング、4. 3の堀調査前、5. 伊那森神社北試掘)
- 写真3 (1. 第1号住居址、2. 1住炉付近土器と炭、3. 1住南東ピット、4. 1住覆土中高坏、5. 1住覆土中刀の鏃)
- 写真4 (1. 第2号住居址付近、2. 2住炉、3. 2住炉焼土断面)
- 写真5 (1. 第3号住居址、2. 3住東側土器、3. 3住中央付近土器底部、4. 3住台石、5. 3住床上出土粘土塊)
- 写真6 (1. 第4号住居炉址、2. 第5号住居址)
- 写真7 (1. 5住埋甕炉、2. 5住埋甕炉断面、3. 5住調査前、4. 6住調査前、5. 第6号住居址)
- 写真8 (1. 6住埋甕炉と覆土中土師器甕、2. 6住埋甕炉埋設状況、3. 6住覆土中ピット底土師器坏)
- 写真9 (1. 小豎穴址、2. 小豎穴址炭化材)
- 写真10 (1. 土壙1、2. 土壙1土器、3. 土壙1覆土)
- 写真11 (1. 土壙4・5、2. 土壙6、3. 土壙8陶器甕片、4. 土壙10覆土中焼土、5. 土壙17、6. 土壙19、7. 土壙27)
- 写真12 (1. ②区東部ピット群、2. ②区中央部ピット群)
- 写真13 (1. ②区西部ピット群、2. ②区東部石の入る柱穴、3. ②区東部黒色土の入る柱穴、4. ②区西端小溝址、5. ②区南西隅落込み)
- 写真14 (1. ③区、2. ③区北部西半ピット群)
- 写真15 (1. ③区豎穴断面、2. ③区豎穴、3. 豊穴下部覆土、4. 豊穴下部壁道具痕、5. 豊穴底陶器と炭、6. 豊穴中焼石)
- 写真16 (1. ③区豎穴覆土中炭、2. ③区焼土ピット、3. ③区特殊遺構)
- 写真17 (1. 通路と3の堀、2. 3の堀ベルト断面)
- 写真18 (1. 3の堀北半堀底、2. 3の堀肩、3. 3の堀西法面窪み、4. 3の堀南側堀底、5. 3の堀西法面豎穴、6. 3の堀南側断面、7. 3の堀底南内耳土器)
- 写真19 (1. 通路部、2. 通路部溝の東端、3. 通路部北法面)
- 写真20 (1. 通路部石積みと水路、2. 通路部石積み西半、3. 通路部水路の石臼と陶器)
- 写真21 (1. 1住出土高坏、2. 1住出土高坏、3. 1住出土壺底部、4. 1住覆土出土繩文土器、5. 1住覆土出土刀の鏃、6. 3住出土土器底部、7. 3住出土土器片)
- 写真22 (1. 5住埋甕炉土器、2. 5住出土土器片、3. 6住埋甕炉土器、4. 6住覆土中ピット出土甕、5. 6住出土土器片)
- 写真23 (1. 6住覆土中ピット出土坏、2. 小豎穴出土土師器、3. 小豎穴址出土甕、4. 1～6住・小豎穴址出土石器)
- 写真24 (1. 2. 繩文土器 早期末～前期初頭・土壙1出土等)
- 写真25 (1. 土壙1出土石器剥片、2. 土壙4・6出土土器片、3. 土壙6出土土器、4. 土壙6出土土器、5. 土壙8・9出土土器片、6. 土壙10出土土器片)
- 写真26 (1. 2. 土壙11出土土器、3. 土壙11・16・17出土土器片、4. 土壙19出土土器片、5. 土壙出土石器)
- 写真27 (1. 3の堀底出土内耳土器、2. 通路部出土内耳土器片、3. 通路付近・南水路、1住覆土出土陶器)
- 写真28 (1. 通路部溝底・石積み出土陶器・須恵器・土器片)
- 写真29 (1. 通路部南水路出土石臼片、2. 小ピット中出土遺物、3. 土壙覆土・グリッド等出土遺物)
- 写真30 (1. 磨製石斧と砥石、2. 宗銭、3. ②区小豎穴址出土炭化材、4. ③区豎穴出土炭化材、5. 鉄滓、6. 調査風景)

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

平成10年度に市内東伊那の稻村城跡がある区域で駒ヶ根市が橋梁整備事業(市道古田切本線)の道路工事を急遽行なうこととなり、平成10年7月3日に事業所管課の駒ヶ根市土木課と駒ヶ根市教育委員会との間で事前保護協議が行われた。設計変更は困難で、試掘調査を行ない遺構等を確認した場合、記録保存をすることとなり、調査面積3,724m²、調査費用400万円で調査計画を策定し、調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施することとなった。

その後、開発事業の国庫補助金の交付決定を待ち、平成10年9月1日付で駒ヶ根市長と発掘調査会長との間で委託契約を締結した。調査会は団長には友野良一氏をお願いし稻村城跡発掘調査団を編成して調査にあたることとなった。

試掘調査は平成10年9月4日から3日間行ない遺構の存在を確認したため、9月25日から10月2日までの6日間で重機による表土の除去と堀内覆土の除去を行なった後、10月6日から現場での発掘調査を開始した。

第2節 発掘調査の組織

1. 駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会（平成10年度）

顧問 吉江 修深（駒ヶ根市教育委員長）

会長 高坂 保（駒ヶ根市教育長）

理事 友野 良一（市文化財審議会会長）

〃 林 趟（〃 副会長）

〃 竹村 進（〃 委員）

〃 新井 徳博（〃 委員）

〃 田中 清文（〃 委員）

理事 中村 雅典（駒ヶ根市教育次長）

〃 北澤 進（市生涯学習課長）

〃 気賀澤 進（駒ヶ根市立博物館長）

監事 赤須 弘侑（駒ヶ根市収入役）

監事 宮脇 昌三（駒ヶ根郷土研究会会长）

幹事 丹羽 文雄（市生涯学習課）

幹事 北澤 武志（駒ヶ根市立博物館）

〃 春日 崇（〃 ）

〃 湯澤 啓子（〃 ）

2. 稲村城跡発掘調査団

団長 友野 良一 (日本考古学協会員) 発掘担当者
副団長 気賀澤 進 (" ") "
調査員 北澤 武志 (長野県考古学会員)
作業協力員 赤羽 慶三郎、伊藤 徳義、河口 常美
竹村 章子、福沢 俊宏、宮崎 啓子

3. 指導・協力者

寺平 宏、北澤 雄喜、竹内 武夫、福沢 正人、福沢 政人
伊藤 邦人、唐沢 一夫(伊那耕地区区長)

(以上敬称略・順不同)

第3節 発掘作業経過

平成10年

- 9月4日(金) 他現場から移動し午後から試掘調査開始。重機で②区の雑木雑草を除き南に寄せる。当初トレンチによる試掘を予定したが、田の造成時に用地南半で土器等が出土したとの話が旧地権者からあり、南半全体の除土を行なうこととする。水田土の下は多量の建物廃材が埋め立てられており、埋め立てのため更に深く掘られている所がある。中世遺物包含層は削られていると思われるが柱穴が幾つか出土し、土壙から縄文時代後期土器がまとまって出土した。
- 9月8日(火) ②区の調査箇所の一部を南側に拡張し、深い搅乱部で住居址2軒の落込みを確認する。また②区南東で石圍炉を発見。3の堀に東西方向でトレンチを設定し、深さ4m以上の本格的堀跡であることを確認する。③区表土除去を開始する。
- 9月9日(水) ③区表土除去の続きを、3の堀から直角に東へ向かって大規模な堀状の堀込みがあり、東へ16m程度伸びて止まっていることがわかる。その北側の平坦地にも柱穴10以上を検出する。③区より東、大蔵寺土蔵手前まで農道の北をトレンチで調査する。伊那森神社北の畠は、道路センターより北側を6m幅で試掘し、遺構・遺物ともなし。本日で試掘調査を終了する。
- 9月24日(木) 当初の開発側との打合せでは調査排土を段丘下に落しても良いとのことであったが、工事の都合上不可となり②③区の表土は搬出することとなる。搬出道整備、水路回し工を行なって開始するが雨天のため難行する。また3の堀内と東西堀と見られた所の覆土を上げる作業も同時に行なう。
- 10月2日(金) テント設営後、開始式と作業打合せを行なう。調査用基点となる道路センター杭を表土レベルから地山レベルに移す。
- 10月7日(水) 10m方眼でグリッド杭打ちをし、②区のジョレンがけ開始。搅乱部があるため墓地前から時計回りに調査を進めることとする。墓地の南で方形の落込みがあり土師器・砥石等が出土。
- 10月8日(木) 昨日落ち込みは第1号住居址となる。覆土上部で高坏片、北の水路際で小刀の鍔が出土。1住より西の柱穴調査。
- 10月9日(金) 調査用ベンチマーク設定。1住より西の柱穴調査、結節縄文がつく土器片出土。1住内部調査ベルトを東西に設定し、北半で土師器出土、覆土に所々炭がみられる。
- 10月12日(月) 1住内部調査。堀込みが10cm程度で黒茶褐色土と炭層のみのため土層断面図は省略し、写真を撮ってベルトをはずす。南東部床からやや浮いて高坏脚部が、北壁付近の覆土中で焼けた砥石が出土。床面の固い部分が南東と北西にある。床面上の炭は3箇所と多くない。

- 10月13日(火) 1住西側から清掃をかけつつ床面の柱穴調査。午後降雨のため中止。
- 10月19日(月) 台風10号通過のため畳んだテントを再設営。1住柱穴調査後、清掃し写真撮影。住居南東隅の長方形ピットから土師器片が多く出土。1住より南のジョレンがけを開始する。
- 10月20日(火) 作業午後から②区東部ジョレンがけ。1住実測開始。
- 10月22日(木) 1住より東から2住炉付近までジョレンがけ。条痕文土器が出土する土壙1を半カット調査。本日より柱穴底に黒色土が入るものと、覆土が黒茶褐色で炭粒を含む柱穴には荷札を入れて区別することとする。1住実測を終了し遺物取り上げ。
- 10月23日(金) ②区東部ジョレンがけと柱穴調査。2住炉の南側は小凹凸が連続してみられ、明確な堀込みを持たない時期の住居址の可能性がある。1住より西のピット群実測。
- 10月26日(月) ②区東部ジョレンがけ続きとピット群実測。土壙1の遺物取り上げ。
- 10月27日(火) ②区東部北半清掃・写真撮影。3の堀の西上の南北方向に伸びる落ち込みは覆土から発砲スチロールが見つかり掘削調査しないこととする。
- 10月28日(水) ②区東部南半調査。底に平らな石を入れた柱穴あり。工事事業者が地主と約束してあったため、2の堀東の果樹園内窪地を調査排土で埋め立てを行なっていたが本日でほぼ終了し、搅乱部への排土に切りかえる。
- 10月29日(木) ②区南東で用地外の南側水田にかかる形で第3号住居址の落込みを発見、覆土中央部に炭が入る。
- 10月30日(金) 3住床上から弥生後期土器出土。ドラム缶状の土壙4・5及び3住近くの柱穴調査。3の堀西上の土出しを合わせて行なう。5・6住の調査開始。
- 10月31日(土) 3住床上で拳大の青灰色粘土塊出土、住内清掃後写真撮影。後期土器が試掘で出土した土壙11調査。5住床付近まで掘り下げ。2住付近実測。
- 11月2日(月) 弥生時代の5住床下で縄文中期初頭土器を発見。②区中央部、5・6住西側の土壙・柱穴調査。ピット覆土は黒茶褐色で炭粒の混じるものと暗茶褐色土とがあり、暗茶褐色土のものに荷札をいれ区別するようする。
- 11月4日(水) 6住覆土上の柱穴実測後、内部調査。住居東と北は深掘りされた搅乱部の下に床面が残っている。炉は埋甕炉で、そのすぐ北で土師器長胴甕が直立した状態で出土。②区中央部の土壙・柱穴調査の続き。3住、4住炉址、土壙4・5の実測。
- 11月5日(木) 6住掘り上げ、清掃後写真撮影。柱穴調査続き。土壙6掘り上げ。5住清掃開始。4住炉址内の清掃と写真撮影。
- 11月6日(金) 5住清掃及び写真撮影。5・6住西側のジョレンがけ。土壙10の覆土中には焼土層があり、縄文土器片も多く出土。4住炉址断面実測。午後、東伊那郷土研究会現場見学。
- 11月7日(土) ②区中央部のジョレンがけ及びピット調査。
- 11月9日(月) 同上。
- 11月10日(火) ②区西部のジョレンがけ。小竪穴址の調査開始。炭化材が形を残している。②区東部と5住の実測完了。5住床下の縄文土器出土箇所を調査。
- 11月11日(水) 小竪穴址の炭化材は放射状に出土し内部に焼け崩れた感がある。土師器の甕片も出土。5住床下の縄文土器出土箇所は土壙底部と思われる。②区西部を南からピット調査。6住実測完了。朝霜。
- 11月12日(木) ②区西部ピット調査。6住内遺物及び5住炉土器取り上げ。小竪穴址炭化材実測。

- 11月13日(金) ②区北西隅と小豎穴址より西の崖端の溝址調査。小豎穴址炭化材をNo.1～14でサンプル採取後、内部を清掃し写真撮影。②区西部清掃後全体写真撮影。②区中央ピット群実測開始。③区のジョレンがけとピット調査を開始する。また③区道路用地外の田を道路高に合わせるため、付帯的に土採りが行なわれることが決まり現地で打合せを行なう。
- 11月14日(土) ③区道路用地部調査。②区中央部実測。道路工事のセンター杭打ちあり。
- 11月16日(月) ③区ジョレンがけ。作業工程打合せ後、3の掘底に東から接続する通路部分内の調査開始。堀内の排土、③区用地外表土はねの現場打合せを行なう。工期が差し迫っており、3の堀土層観察用アゼは外さず残し、堀内へ重機を入れて排土するため通路南法面の土留めの積石も写真記録のみにとどめることとなった。②区中央部ピット群実測完了。
- 11月18日(水) 通路の石をはずす、法面石積の下部に細かい石の列が西へ伸びており、3の堀へ水を落してしたものと思われる。3の堀法面調査し3の堀西側法面に掘られた南の豎穴調査。②区西部実測。
- 11月19日(木) ②区西部遺構実測を完了し本日で②区調査終了。3の堀は薬研堀で堀底南端で内耳土器がまとまって出土した。堀内南の豎穴かなり深いものとなる。墓地の移転工事が開始される。
- 11月20日(金) 3の堀南部と通路の調査。通路内北側の東西溝内調査。溝底は所々深く落ち込みがあり、須恵高坏や内耳土器片、すり鉢等出土し東からP1～4として取り上げる。石積みの北の水路跡の礫の間で、石臼片・白釉陶器・内耳土器片・すり鉢片・須恵器片などが出土する。
- 11月21日(土) ③区用地部分清掃後写真撮影。3の堀土層断面写真撮影。午後降雪のため中止。
- 11月24日(日) 3の堀北部調査後写真撮影。③区用地外区を重機による表土はねの後ジョレンがけ。柱穴81・小ピット58・土壙12基以上を確認する。
- 11月25日(水) ③区ピット調査。午後重機による堀・通路の排土を実施し内部のジョレンがけ。通路石積みの北に礫が東へ伸びており、土地改前の水路跡と思われる。
- 11月26日(木) ③区ピット調査。堀南部・通路を清掃後写真撮影。③区用内実測完了、堀内実測を開始する。
- 11月27日(金) ③区ピット調査。北端中央付近で土壙から縄文後期土器が出土。③区南東部で豎穴を発見、上部は径1m程の円筒状で深さ1m以下で広がっている。覆土中には大きな石が入っており、中の石に隙間が有り、覆土が軟らかく危険なため手掘りによる調査は中止する。3の堀・通路実測。
- 11月28日(土) ③区北部ピット調査及び全体測量。堀・通路実測。
- 11月30日(月) 重機によって③区中央の排土の山を通路よりに移動。工事後の田の肥土の件打合せ。遺跡遠景写真等撮影。豎穴南半を重機によりカットするが逆傾斜の壁部分はくずれてしまう。
- 12月1日(火) ③区中央部調査開始。3の堀土層断面実測を行ない堀部分の実測完了。
- 12月2日(水) 降雨のため午後から③区調査の続き。グリッド杭設定。豎穴内部調査、花瓶状の断面形となる。
- 12月3日(木) 午後3時頃から雨と雪。③区調査の続き。豎穴下部調査、覆土中に炭化材が含まれており、サンプル採取。壁面には道具痕が残っている。③区北半測量開始。
- 12月4日(金) ③区清掃後、全体写真撮影。豎穴調査及び下部覆土のサンプル採取。テントをたたみ調査道具整理。③区北半実測。
- 12月6日(日) ③区北半実測を完了し、南半開始。
- 12月8日(火) ③区実測。地質調査のため寺平宏先生が現場を訪れる。堀内パミス層は移動して来たもののこと。12月9日(水) 午前中で実測を終了し、本日で現場での調査を完了する。調査後すぐ工事の土移動等が始まる。
- 12月11日(金) 発掘器材搬出。以降整理作業にとりかかる。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形・地質

1. 位置 (第1図、写真1)

稻村城跡は長野県駒ヶ根市東伊那の伊那耕地区に所在する。JR飯田線駒ヶ根駅から約3.7km東方に位置し、交通上からみれば、駅より500m北の市道古田切線を東へ2.5kmで天竜川にかかる「駒見大橋」(平成11年7月完成予定)に至り、その東の段丘を登る坂道部分が今回の調査地で、稻村城跡は南側一帯に広がっている。

市内東伊那は合併前には伊那村であり、城跡の南あるいは東の集落は「本村」と呼ばれている。また城跡のすぐ東には伊那森神社があり南東には大蔵寺が所在する。

遺跡の緯度経度は北緯35度44分25~30秒、東経137度58分42~48秒で、座標系では第VII系のX=-28.75~-28.85km、Y=-47.01~-47.18kmである。標高は平坦部で606~612mとなる。なお調査地域の地番は駒ヶ根市東伊那651-1ほか21筆に及んでいる。

2. 地形 (第1~3図)

東は赤石山脈の前山である伊那山地があり、西には木曽山脈があり、この並行する山地山脈の間が伊那谷で、谷の底を天竜川が流れおり、川の両側はいわゆる河岸段丘地形が発達していることで知られている。遺跡の所在する付近の段丘面は、天竜川氾濫原から25~30mの比高を持つ段丘崖の上が第1段丘面で、さらに県道伊那・生田・飯田線の東に10~15m程度の段差があり、この上が第2段丘面となる。

市内東伊那は、山地山脈から流れて天竜川へと注ぐ塩田川、天王川、唐沢川などの複数河川により、開析され複合扇状地が形成されている。

稻村城跡は天竜川左岸の河岸段丘上の段丘端から東に150mほど奥まった場所に位置し、すぐ南側は天王川の深い渓谷となっている。天王川から340m南には唐沢川がやはり西へ流れしており、この右岸に稻村古城がある。

また、天王川左岸崖には湧水がありワサビ田が作られている。大蔵寺より西の「北の城」(③区)では3の堀の底道を下っていくとすぐ右側で、旧田面 610.6mより6mほど下の所に湧水地点がある。西の河岸段丘崖には湧水が無く天王川と唐沢川の谷に湧水があるので、地元の人の話では地下水脈が伊那森神社辺りで分かれているのではないかといふ。

3. 地質 (第3図)

東の赤石山脈と伊那山地との間に中央構造線が走っており、市域の地質基盤は基本的に領家帯に属する岩盤から成っている。当地域の下層には、伊那山地から流れて西へ流れ天竜川へと注ぐ複数河川が形成する扇状地礫が厚く堆積している。

この礫層の上に御岳山噴火物を主とするテフラ質堆積物がのる形となる。テフラ質堆積物は御岳火山灰層の所々に軽石層あるいはスコリア層を挟む形で堆積し、下部には軽石層である御岳第1テフラ(On-Pm I)が厚く堆積している。東伊那地区は上伊那地方でも最もこのPm-I層の堆積が厚い地域として知られ、その厚さは2m以上にもおよび、昔は各所でこの土が白粘土化した白土(カオリン)の採掘が行われており、現在「ふるさとの丘」運動場の駐車場となっている場所や市立東中学校付近でもかつて白土を採取していたといふ。

「ふるさとの丘」付近で確認した地層では、Pm-I層の下は青灰色あるいは淡茶褐色の粘土層があつて不透水層となっていた。Pm-I層より上は火山灰の堆積した黄褐色のテフラ層(ローム)土であり、このハードロ

ーム層中には粒状のPm-IV層が40cm位の幅で入っていた。

ハードロームの上はソフトロームが約50cm堆積し、表土(腐食土)の厚さは30~40cm程度となっている。遺構はローム層を堀込んで作られている。

当遺跡付近では、市立博物館学芸員寺平宏氏に調査中3の堀内部を見ていただき、また調査終了後工事断面で土壤分析をしていただいている。この付近の軽石層は2次堆積であることを教えていただいた。

付近に見られる岩石は天竜川より東に特有の、圧搾作用を受けて脆い花崗岩と縞状片麻岩(砂石)がほとんどであった。当地方で縄文時代の石器に用いられる岩石は、小型石器に和田岬産の黒曜石、木曽谷のチャートが、石斧などには三峰川沿いに母岩のある緑色岩、硬砂岩などが、大型石器には花崗岩、縞状片麻岩や他地から持ちこまれる安山岩などが使われることが多い。

第2節 歴史的環境

稻村城の構造、付近の地名、稻村氏に関しては第IV章にまとめて記述してあるのでご覧いただきたい。

《周辺の遺跡》（第2図）

東伊那地区の河岸段丘上は、小河川が開折した丘陵状地形が発達するとともに各時代の遺跡が数多くあり、大正末年発行の「先史及び原史時代の上伊那」にも多くの遺跡が確認されている。以下、時代ごとに主な遺跡を概観して行くこととする。

縄文時代の遺跡は、反目南(4)、殿村(13)から早期土器片がまとまって出土しており、前期では反目(5)、上塩田(11)で住居址が発見されており、殿村(13)では前期住居址12軒が検出されている。縄文中期も特に中期後半になると、伊那谷では遺跡数が急激に増加し大規模な集落が営まれるようになる。例えば反目(5)の発掘調査では59軒の縄文時代の住居址が検出され、内中期中葉期が17軒、中期後葉期の住居址が38軒となっていた。この他に中期後葉期の住居址が検出されたものとしては、殿村(13)で8軒、大久保北(7)で7軒が確認されている。後・晩期になると遺跡がまた減少し、青木北(12)で後期の環状配石址群が、上塩田(11)で晩期の配石群が発見されている。

弥生時代の遺跡も重要なものが多く、狐久保(9)では12軒の住居址と竪穴址が1軒確認されており、弥生時代後期の集落址として知られている。丸山遺跡(2)では、昭和26年の調査で大型の住居址1軒が検出され、遊光(3)でも住居址1軒が、殿村(13)では住居址3軒のほか12m角程の方形周溝墓が発掘調査により確認されている。

反目南遺跡(4)では後期住居址2軒と方形周溝墓3基及び後期壺棺墓1基が検出され、注目すべき遺跡である。

さらにその北側の反目(5)では後期の住居址17軒が調査されている。

これら殿村、遊光、反目南、反目などの遺跡は低位段丘面に位置し、この面より1段高い東側の中位段丘上には、垣外上(8)や、住居址1軒が調査された善込(7)がある。さらに善込の東には栗林神社東(8)があり、住居址10軒とその50m西方に土壙を伴う壺棺墓1基が検出されており注目される遺跡である。

以上のように当地区における弥生時代の遺跡はいずれも後期、土器による時期区分では座光寺原・中島式期のものである点が特徴的であり、近隣地域においても同様のあり方をみせる。

古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡には、遊光(3)、反目南(4)、反目(5)、上塩田(11)などがあり、古墳については東伊那に少なくとも3基以上の円墳があったとされるが、いずれも消滅してしまっている。

天竜川左岸段丘上には、特にその立地条件を活かした中世城館跡が多いことで知られ、中沢地区の原城(14)、東伊那地区では稻村古城(15)、稻村城(1)、遊光城(17)、高田城(18)、大久保城(19)と軒並みあり、いずれも段丘崖を利用して造られており、上位丘面上には城村古城(20)、城村城(21)、青木城(22)があり、塩田集落北の

山の尾根には塩田城がある。また遊光(3)では15世紀末の住居址に炭化材が良好な状態で残存しており、陸屋根式構造をもつ住居であったとみられ、遊光城との関係を知る上でも貴重な例である。

近世では、特に山田遺跡の西方に山田の富士塚と呼ばれる塚と堤が良好な状態で残されており、市の史跡指定を受けている。

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 発掘調査の概要(第3図)

②区では当初、トレンチによる試掘調査を計画したが、旧地権者から水田の造成時に遺構・遺物が出土したとの話があったので面的な調査に切り替え、住居址の一部・土壙・柱穴などを確認したため全面について表土を排土して調査することとした。ほぼ全面について地山は削られ、面積の半分程は深く掘削され建物廃材が埋立てられていて、攪乱が著しく遺物包含層は失われている状況であった。

3の堀については試掘トレンチで堀形を確認したので、覆土土層観察用のベルトを設定し、調査可能な部分は重機による排土を行い調査している。調査地南は新設道路に接続する登坂道がつくられる道路設計となっていたが、調査地南端が水路回しの関係上限界で、それ以上の調査は不可能であったが断面で堀形が確認できたので、堀はさらに南へ伸びていると思われる。

通路部については、③区の試掘時に3の堀と直交し東に伸びる落ち込みを確認し内部の調査をおこなった。北と南に法面があり全体に堀のような形であるが、内部は東高西低の傾斜をもつ溝・道があり、3の堀の堀底道に続いている感があった。十分に類例等を検討する時間がなく、以上の全体について調査の便宜上「通路」という仮称を用いたが適当な名称があれば訂正したい。

③区は道路工事予定地内のみ調査する予定であったが、道路高に合わせて北の田の田面を下げるうことになり、付帯的に急遽調査を実施することとなり、すでに通路部を調査中であったので表土の搬出ができず、北部から順に排土の山を重機で南に寄せつつ調査を行った。

③区から東の大蔵寺門前までの区間は、農道部分を②・③区表土の搬出道として使用しなければならなかつたため、農道南の調査と、農道北はトレンチ調査のみを行ったが、若干の落ち込み等みられたものの明確に遺構と言えるものは無く、遺物も発見されなかつた。

伊那森神社の北の畠は予定道路のセンター線から南を6m幅で試掘を実施したが、遺構・遺物とも発見されなかつた。

また、②・③区では10×10mの調査用グリッド杭を設定し、予定道路直線方向で西から算用数字で1～7を、それと直交する方向では南からアルファベットA～Fを付け、南東隅の杭をグリッド名として平面測量に用いた。予定道路のセンター線が5列となる。

標高は県道伊那生田飯田線脇にある他工事用杭から調査用ベンチマーク609.800mを設定し測量に用いた。

写真による記録は、モノクロトリバーサルの35mmフィルムで撮影を行っている。

なお、現場は緊急に工事が実施されることとなつたため、調査中から調査が終了した部分から道路工事が行われ、調査終了と同時に掘削が行われ現在では遺構等は残されていない。

第2節 遺構及び遺物

1. 第1号住居址

(1) 遺構(第7図、写真3)

当住居址は第6号住居址の6m北にあり、②区北端に位置している。プランは壁が若干外に丸みを帯びているが、ほぼ方形で、規模は4.5×4.5mを測る。住居址の主軸方向はN-67°-Wとなる。堀込みは10~25cm前後で、上部は水田造成時に削られているため浅くなっている。北西隅の壁は水路工事のため破壊されていた。

壁の内側には幅10~15cm深さ2~5cmと深い周溝が、東・北・南の各壁際に見られる。住居址内部には後世の柱穴などのピットが多数あり判然としないが、当住居址の主柱穴はP1~P4の4本であろう。P2とP3は南北方向で壁から50cmほど離れた位置に掘られているのに対し、P1とP4は壁から80~110cm離れた位置に掘られている。炉は住居址西寄りに径30cm深さ7cmの円形のわずかに窪む部分があって底面が焼けており地床炉と思われる。炉の位置からすると当住居の入口は東の周溝の途切れた部分と考えることができ、炉はP2とP3を結んだ直線上より奥のやや北寄りの位置にある。住居の南東隅のP1の外側には50×60cmの平面形が長方形のピットが掘られていて、底部では土師器片がまとまって出土している。床面はこの長方形ピットの周りとP3付近で固く締っている箇所が部分的に見られた。また住居址の覆土中には炭粒が含まれ、床面上に炭化材の残る箇所が3箇所あり、当住居址は上屋が焼けた住居址であることが観察できた。

(2) 遺物(第17図、写真3・21)

住居址の東壁中央付近で、炭粒を含む覆土中から図17-1の高壙が出土しており、壙部口径は13.2cmで下部に稜をもち脚部は下が欠損している。また図17-2の高壙は覆土出土のもので、脚部には径1.1cmの丸い孔が2ヶ所あけられている。炉の脇では図17-3の壺底部が出土しており底径は8cm。石器は図17-10~13が出土しており、10は縞状片麻岩の凹石で、11は砥石でススが付着している。12は緑色岩の剥片で、13は黒曜石製の石錐で縄文時代のものと思われる。また当住居址に属するものではないが、覆土中に縄文土器が混入しており、図17-4・5・7・9は中期末、6・8は後期の土器である。覆土より上の搅乱層からは、図17-14の刀の鍔が出土しており、厚さは0.5mmと極薄く鍔本体に付く金銅製の外装と思われる。形は木瓜形で茎孔は長さ27mm、棟側の幅が9mmで小刀のものであろう。

住居址の時期は土師器から6世紀代、長野県史編年で古墳時代Ⅲ期と思われる。

2. 第2号住居址炉址(第8・18図、写真4)

表土を除く際に②区東部の第1号住居址南東7mで、土壙1~3の南側に炉址が発見された。炉石は北と東に2個を残すのみだが南側以外には石を据えた窪みが残っており、炉の周りに石を並べて囲う形式の炉であることがわかる。焼土は平面で50×30cmの長方形で厚さは6cmと厚く他の土等は混じらない。炉の2.5m東には多数の浅い窪みが東西方向で4.8m程連続しており、南端で東に折れて4m続いている。この連続する窪みと炉の焼土の状態から、断定はできないが炉は住居址のものであると判断した。炉のレベルからするとあったとしても壁と床面は削られて残っていないこととなるが、ローム層のレベルから明確な堀込みを持たない住居であった可能性が高いと思われる。炉の北東には土壙1~3が並んであるが炉と近く関連は不明である。

出土遺物は炉体焼土中から文様を持たない土器小片と図18-1の焼けた黒曜石石核が出土しており、炉址の時期は縄文時代であると考えることができる。3は緑色岩の小型棒状石で長さ10.5cm幅2.4cm。断面は三角形で一方がやや太くなり、1面に磨滅痕が認められる。

3. 第3号住居址

(1) 遺構(第10図、写真5)

当住居址は②区南東隅に位置し、住居址北東部分が検出されたが住居址の大部分は調査対象域外で全体の調

査が実施できなかった。北西には近接して第4号住居址炉があり、北壁東で土壙5と切り合う。図10の断面図のように土壙5の覆土にローム土を入れて貼床をしている。北西隅付近では北壁にかかるて当住居址を切るかたちで後世の柱穴が検出されている。掘り込みは西壁で20cm前後あり北壁で13~20cmとなっている。当住居址のプランは不明だが北壁は東にまだ続く感があり、北壁と西壁は直線的で北西隅も直角に交わっており、諏訪地方で主体的にみられるタイプの比較的大型の住居址である可能性が高いことが予想できる。壁の方位からすると住居の主軸方向はN-35°-EかあるいはN-55°-Wとなる。住居址内部の北西隅には北壁と西壁からそれぞれ120cm離れた位置に径15cm深さ7.6cmの浅いピットがあるが、主柱穴とするには浅すぎるのでないかと思われる。周溝は北壁沿いではなく、西壁沿いには周溝らしき部分と極浅い窪みが4ヶ所にみられる。

床面は固くしまっているが北壁際には固い面の無い場所があり、長方形のピットが3ヶ所にみられ、さらに床面がやわらかい場所の床面上では粘土塊が出土しており、この部分は住居址に伴うものであると思われる。また覆土には細かい炭粒が混じて黒色を呈するが、炭化材等は見られず床面も焼けてはいなかった。

(2) 遺物 (第19図、写真5・21)

土器は西寄りの床面上で、図19-2の底径8.6cmの壺底部が、土壙5に貼床した部分で4単位の波状櫛描文が2条施文された弥生土器片が出土している。石器は、北西隅で表面に使用痕のある縞状片麻岩製の台石が検出され、大きさは30×40cmで厚さは7cm前後ある。この台石から20cmほど南の床面上で緑色岩製の磨石(図10-4)が出土しているが、表面は滑らかで台石とセットになるものかどうかは不明である。また床面上で5cm大の2個の粘土塊が出土しており、青灰色で砂等が混じる荒い土質であった。

4. 第4号住居址炉址 (第9図、写真6)

表土を除く時に第3号住居址に近接して住居北西に炉址が発見された。炉穴は平面形が楕円形で146×94cmで深さは25cm位ある。炉石は炉穴の底に50~60cm大の平な石を3個並べ、炉の北半は長さ50~70cmの長方形の石を立てて北・西・東の3方を囲っている。炉の南半には炭・焼土のほか灰がみられた。一番南の敷石の下には厚く灰層が堆積しており炉の南側が灰出口であろう。炉の主軸方向はN-11°-Eとなる。出土遺物は無く時期不明だが炉の形態から縄文時代の住居址のものと思われる。しかし炉体の周囲では住居址の柱穴・壁等は確認できなかったので、屋外単独炉址の可能性も残る。

5. 第5号住居址

(1) 遺構 (第10図、写真6・7)

②区中央部南端で第6号住居址の南1.4mのところに位置している。住居址北側では縄文時代中期初頭の土壙6の上に貼床をして住居址床が造られている。住居址北西付近は重機バケットと思われる長方形の搅乱によって破壊されている外、住居址東半は水田造成時の深掘りによって破壊されている状況であった。プランは東半の壁が失われているため不明だが、残っている壁からすると4.6×4.6mの隅丸方形の住居であったと考えることができる。壁の上部は削られて残っていないが、残っている部分での掘り込みの深さは15cm前後ある。床面は固く締まっていて周溝は検出されなかった。主柱穴はP1~P4の4本でP1・P4とP2・P3とで形状が異なる。P1とP4は平面形が径20cm程度の円形で深さはP1が12cmを測りP2が推定で40cm程となる。

P2とP3は平面形が東西に長い30×40cmの楕円形を呈し、深さはP3が55cm P2も推定で55cm位になると思われる。住居址の主軸方向は柱位置からN-27°-Eとなる。炉は住居北寄りに埋甕炉が設置されていて南入りの住居であったことがわかる。炉の位置はP1とP4を結んだ直線上より奥でやや東寄りの位置となる。炉体に使われている土器は甕で口頸部と胴下部を打ち欠いた状態で埋められているが、水田造成時に上に重機が乗ったとみえてつぶれた状態で出土した。埋設は土器の大きさに合わせて穴を掘り埋設されている。土器の周囲は30~40cmの範囲でローム土が焼けてボロボロとなっており、土器内部には黒茶褐色土が入っていた。

(2) 遺物 (第20図、写真7・22)

埋甕に使われていた図20-1の土器は胴部径23cmの胴部が丸く膨らむ甕で、外面は縦及び斜めのハケ、内は横ナデによる調整である。文様は4単位の波状櫛描文が恐らく2条間隔をあけて施されていると思われる。

この外に図20-2・3の櫛描文をもつ土器が炉付近で出土している。石器は図20-4の硬砂岩製の横刃形石器が出土している。住居址の時期は弥生時代後期に属する。

6. 第6号住居址

(1) 遺構(第11図、写真7・8)

第5号住居址の北、第1号住居址の南の②区中央部に位置する。表土除去時には住居址の南西部がかかつて発見され、北側と東側は搅乱が入っており破壊されていると思われたが、南西から床面を追っていくと下部で遺構が残っていることがわかり、東壁は水田造成時埋立ての深掘りによって削られていたがある程度まで住居址の規模を把握することができた。住居址のプランは隅丸方形で、規模は南北方向で6.4mを測り、東西方向でも7m程度はあると思われる。掘り込みは東側が削られているが、西壁で40~47cmあるので元は残る各壁もその位あったと思われる。床面は全般に固く締められているが、南側から重機掘削の搅乱があり大きく床面が失われている。固い床面は壁の10cm手前で途切れわずかに窪んでいて明確な形ではないが周溝も存在した。主柱穴はそれぞれ形が違うがP1~P4の4本である。炉は住居南西寄りに埋甕炉があり、住居の入口は南東入りとなる。炉の位置はP3とP4とを結んだ直線上より奥寄りに位置している。炉体となる土器は甕の胴下半部を欠いて逆位に埋められている状態であった。炉体の周囲は径54cmの円形に掘り窪められており、土器の周囲の土はよく焼けている。住居の入口があると推定できる東壁の中央付近には不整形なピットが掘られていて、掘り込みが深い当住居の入口施設に関係するものと思われる。

(2) 遺物(図21、写真8・22・23)

埋甕炉に使われていた土器は口径25cmの弥生土器の甕で、頸部に10単位3条の櫛描文を施し、内部には1.5cm幅の輪積み痕が残り焼成は堅緻である。その他の出土遺物では、2は口径6.7cm胴部径9.3cm高さ5.1cmの壺で、3は弥生土器底部、6は灰褐色を呈する焼成堅緻な口径17.4cmの土師器甕である。石器は10の石斧の外、11の緑色岩の小型棒状石が出土しており図の矢印の部分に磨滅が認められる。

住居址の時期は弥生時代後期に属する。

7. 第6号住居址覆土中ピット(図11・21、写真8・22)

第6号住居址の埋甕炉から24cm北に径36cmのピットが検出された。弥生時代に属する第6号住居址の床を切る形でピットが掘られていたはずだが住居覆土での確認はできなかった。ピット中からは図21-7の土師器甕が直立したような状態で出土し、この甕の下で底部からは黒色土器壺が出土している。甕は長胴甕で口縁部は失われているが胴部最大径は21.5cmあり現在高は39.8cmある。表面には幅5mm位のカキ目による調整がなされ、色調は全体に暗灰褐色を呈する。内黒壺は口径13.2cm高さ5.5cmで、内面は黒色処理され外面は笠削りの後磨きによる調整がなされている。

出土土師器からこのピットの所属時期は県史編年の古墳時代IV期に属すると考えることができる。

8. 小豎穴址

(1) 遺構(第12図、写真9・30)

②区西部の最西端で、断崖の端から2.4m内側の場所で小豎穴址が発見された。プランは北壁がやや斜めだが、ほぼ隅丸長方形と言ってよく、北東隅には50×60cmの楕円形で深さ35cmの土壙があり、小豎穴址の張出し部なのか或いは独立した土壙なのか不明である。規模は南北方向で3.6mを東西方向で2.9mを測る。掘り込みは壁上部は削平されていると思われるが、東壁で25~27cm、西壁で5~10cm、南壁で20cm前後、北壁で10cm前後となっていた。

床面は南側3分の2で堅く締まっており、北側3分の1程度は軟らかいローム土のままであった。床面の固い部分には多数の浅い壅みがあるが、柱穴とわかるピットは見られなかった。

またこの小竪穴址の覆土は多量の炭と一部焼土を含み、第12図下段の図の通り炭化材が形をとどめて出土した。炭化材は幅が最大で10cm程の断面が長方形となるものが多く、中央付近では径2cm程の棒状のものも出土している。炭化材は竪穴の中心から放射状に出土する状況であり、上屋構造がそのまま竪穴内部に焼け落ちた感がある。

(2) 遺物 (第22図、写真23)

小竪穴址からは図22-1～3の土師器甕が出土している。1は口径14.6cm胴部最大径17.5cm現在高23.3cmで2次的に焼けており、調整痕は外面胴上部が笠削り、胴下部にはカキ目が付き、内部には輪積み痕が残る。形状は頸部が段をもってくびれるのが特色である。土師器はこの他に2・3の甕破片が出土しており、2の底径は7cmを測る。石器では花崗岩製の磨石の断片と前述の小型棒状石が出土した。

当小竪穴址は出土土師器から県史編年の古墳時代IV期に属する。

9. 土 壤 (第13～15・23～34図、写真10・11・24～29)

土壙は②区では1～18、③区では19～27の計27基を確認した。ここでは遺物が出土した土壙を中心にして土壙をみていくこととする。

土壙1は②区東部の第2号住居址炉の1.4m北に位置し、すぐ南には土壙2と土壙3がある。土壙1の平面形は円形に近い変五角形で112×112cmの大きさがある。深さは35cmあり壁は内傾し袋状となっている。土壙の内部からは胎土に纖維を含む条痕文系の土器が出土した。図23-1～5は土壙1出土の土器で、1は口縁部に笠状施文具による矢羽根状沈線をめぐらし、その間に細い棒状施文具による刺突文が入る。口縁下5cmの所には隆帯を貼り付け、隆帯上には矢羽根状沈線文が付けられている。隆帯より下は横方向の条痕文が付き、裏面にも横方向の条痕文による調整が行われている。器厚は0.7～0.9mmで、胎土には纖維が混入されている。他の2～5の土器も纖維を多く含み条痕文が付くが焼成は堅緻である。これらの土器は縄文時代早期末の茅山下層式土器に併行する時期の東海系土器と思われる。石器は、図23-6がチャート製の搔器で、7と8は黒曜石製剥片石器で、他に写真25のように剥片が出土している。

ここで図24-1～15の縄文時代早期末～前期初頭の時期のもので、他の遺構等から出土した縄文土器についても見て行きたい。1～9は条痕文が付く東海系の土器で胎土に纖維を含むもの。10は表面が灰黄色を呈し爪形文が施文される粕畑式土器で、11はやはり胎土に纖維が混入される細かい縄文が付く土器で、13は厚さが3mmと極薄い表裏縄文土器である。14と15は斜格子の浅い沈線文が付く土器である。

土壙4と土壙5はドラム缶状土壙で第3号住居址の北側に位置する。土壙4は径156cm深さ68cmで、図25-1～3の縄文が付く土器が出土している。土壙5は第3号住居址に貼床され、径152cm深さ60cmを測り、壁は南東側を除き若干袋状となり、出土遺物は無い。

土壙6は第5号住居址床に貼床され土壙底部のみが検出された。底径は88cmあり住居床面からの深さは約16cmある。底部の壁際には8～30cm大の石や石器6個と土器片が環状に配置したように出土した。復元できた図25-1の土器は口径22.5cm現在高24cmの波状口縁をもつ縄文中期初頭の土器である。文様は半裁管施文具による平行沈線文が特徴で、口縁下と胴部に2帯、格子状の文様を配し、胴上部には梯子状の沈線文と上下からの半円形の文様が施文され、口縁部に貼付られた隆帯には半裁管施文具による押し引きが施される。図25-9～12の土器も縄文中期初頭期の土器で、胴部は円筒に近い形で口縁部が大きく外に開く器形である。文様はやはり半裁管施文具による平行沈線によって描かれ、口縁部は幾何学的な文様が、胴部には縦方向の平行沈線が施文される。土壙6からは図25-4のような縄文が付く土器も出土しており同時期のものである。石器は13が礫器、14・15が石斧で14の先端には煤が付着する。16は剥片を加工したナイフ形石器で、17は石匙である。石器の石材には16の緑色岩を除き硬砂岩が使用されている。

土壙8と土壙9は径120cm深さ50cm前後で縄文中期末の土器が出土している。土壙8の覆土上層から図40-1の陶器甕の底部が出土し、土壙9の覆土上層からは縞状片麻岩製の多凹石(図34-1)が出土しており、配石墓である可能性もある。

土壙10は土壙9の南西、②区中央部南端に位置している。径は140cmあり深さは30cm程度で覆土中層には焼土が見られた(写真11-4)。覆土中には縄文中期後半期の土器片多数が含まれていた(図28-1~14)。石器は29図-1・2の緑色岩製のナイフ形石器が出土した。

土壙11は第5号住居址の北西、第6号住居址の南西に位置しており、不整形で複数の柱穴に掘り込まれ破壊されている状態であった。規模は径80cm深さは20cmを測り、多数の土器片がまとまって出土している。図30-1~7は縄文時代中期後半期の土器で、4~6は胴が張り口縁部が内に傾く器形で、口縁部には列点文があり胴部文様はU字状の沈線文が施文される。9~16は磨消縄文が付される後期初頭の称名寺式土器で、8は網取式であろうか。中期末から後期初頭土器の連続性がわかる例と言えよう。

土壙17は小豎穴址の西、②区最西部に位置している。西側は断崖にかかるつており調査不能であったが、径130cm深さ77cmのドラム缶状の土壙で、内部から縄文時代中期末の釣手付深鉢の釣手部の破片が出土した。釣手は粘土紐を2本縫り合わせて作られている。

土壙19は③区北端部に位置している。調査可能区外にかかるつており南半部の調査のみに終わった。形状は深さ54cmの土壙本体が、東の深さ11cmの浅い土壙を切る形と思われる。土壙底部では図34-2の硬砂岩製磨石が出土し、土器は図33-1~12の縄文中期末の土器が出土している。1・2の土器は胴部が丸く張り口縁部が内傾する器形で、無文の口縁部の下に隆帯を貼り付けて、その下には縄文が施文されている。

土壙27は③区の7-Dグリッド杭から5.6m東に位置し、形状は88×88cmの隅丸方形で底径は45cmと壁は斜めである。覆土には5cm以下の多量の石が入っていた。

10. 小溝址(第4図、写真13)

②区西端の小豎穴址の西に、断崖端部に平行して小規模な溝址が検出された。長さ5.4mにわたって調査することができたが、北は調査時に立木補償ができていない場所があり調査することができなかつた。幅は40cm深さは10cm前後で底面には浅い窪みが連続して見られた。出土遺物は無く時期不明で用途も不明である。

11. ②区南西隅落ち込み(第4図、写真13)

②区南西隅の断崖端部で落ち込みが発見されている。底の幅は120cmで深さは25cm程度あり、溝状の堀込みとなつていて、北西端部で断崖に向かって落ち込んでいる。調査対象地区外で2の堀の東土壙の東は、南北に窪くなつており当遺構がさらに南に続いていることは十分考えうる。②区の南には東西方向に長い窪地があつたとの地元の人の話があり、この溝或いは縦堀に直角に接続するものとすれば、土壙のために2の堀への排水ができない、土壙の手前に排水のための溝を掘つて断崖下に排水していた可能性があると思われる。

12. ③区豎穴(第15図、写真15・29)

③区の7-Eグリッド杭から6.4m東に豎穴が検出されている。かなり深い豎穴で下部が袋状となつていて、手掘り調査では落盤の危険があるため南側を重機によって掘削して調査を実施した。上部は深さ90cmまで、径100cmの円筒状に掘られ、下部は膨らみをもつて広がつており、底径は190cmで断面形はやや幅広な徳利状を呈する。下部の壁面には斜め方向の道具痕が残り、幅7cm位の板状の刃をもつ道具によって壁を削っていることが観察できる。豎穴内部の状況は、上部には50cm大以下の大きな石が入つており、石の間の黒茶褐色土は軟らかく隙間ができる所もあり、人為的に石を投げ込んで埋められたと判断できる。これに対し豎穴下部の覆土は水平の堆積で、断面図のとおり上部には厚さ4cmの黒茶褐色とローム土の混土によるバンドが2層入り、底から上80cmの覆土には、焼けた石と炭化材が数多く含まれていた。炭化材は年輪の幅が比較的広く、芯まで

炭となっておらず木質部の残るものもあった。また竪穴の掘られている場所の地山地層は深さ120cm以下で砂混じりのローム層となっていることも同時に観察することができた。出土遺物は底面上で図40-2・3の15世紀の常滑産のすり鉢片が出土し、覆土中で4の灰釉小型皿が出土し、竪穴も同時期のものと思われる。

13. 焼土ピット（第15図、写真16）

③区7-Eグリッド杭の西方3.6mに位置する。形は不整形で全体で、長さ200cm幅130cmを測る。底部は2つあり径25cmと20cmで、このうち深い方の北西側の覆土上層に焼土がみられる。焼土は50×30cmの楕円形で厚さは20cmあり、住居址炉である可能性もある。出土遺物は無く時期は不明。

14. 特殊遺構（第15図、写真16）

③区の土壙25と土壙27の間に位置する。プランは108×108の隅丸方形で深さは10cm前後ある。特徴的なのは幅8cm位、深さ2~7cmの周溝がある点である。内部には径10cm深さ2~10cmの小穴が3ヶ所と、深さ2~3cmの浅い窪みが2ヶ所みられた。出土遺物も無く、時期用途とも不明である。

15. 3の堀（第図、写真17・18・27）

3の堀は、②の郭と③の郭の間に掘られた南北方向の横堀で、試掘で堀形を確認し道路用地にかかる16.8mの区間について発掘調査を実施した。それより南は掘削不能で調査することができなかつたが、断面で堀形が確認でき堀が南へ続いていることがわかつた。一方調査区北側は天王川の谷まで続いていることが地形上確認できる。

この堀には後述する「通路」が東からほぼ直角に接続しており、この接続地点より以北の堀の方位はN-16°-Wで、以南はN-2°-Eに角度を変えて南に続いている。堀の規模は幅8.4~9.2m深さは3~3.4mを測る。堀形は薬研堀で、底の部分の溝は幅50~70cm深さ10~70cmある。堀の西法面上部には窪みが認められる。平面形は180×270cmの楕円形で深さは70cm程度で、覆土は黒茶褐色土であった。時期・用途とも不明である。またこの窪みから3.6m南の西法面には深い竪穴が掘られている。平面形は径300×300cmの円形で底部は150×150cmの方形に近い形となる。深さは170cmを測り、堀の上部から堀底より90cm上まで掘り込まれている。主軸方向はS-79°-Eで通路溝の延長線上に位置し東に向かって開かれている形である。出土遺物は無く用途についても不明の遺構である。

堀の覆土の状態は東西方向に土層観察用ベルトを設定して断面観察を行っている。堀底付近ではかつて水が流れていたことを物語る砂層や砂利層が認められた。底より40cm上では箱型の土層の堆積があり、流れ込みと思われる多数の石が含まれており、ある程度堀底が埋まった時点で堀底道としての利用があつたことがわかる。

また地元の人の話では、ごく最近まで天王川の河原敷の「がらん」という地名の場所と段丘上の集落とをつなぐ「はなもりこうじ」と呼ばれる小道があったとのことであった。

3の堀からの出土遺物は、調査区南端の堀底から図35-1の内耳土器がまとまって出土した。口径26cm底径23cm高さ16.5cmで内耳部分は発見されなかつた。器厚は8mmで底の厚さは4mmと極薄い。口縁部は「く」の字状に屈曲し、内面には指頭による調整が段となって残っている点特徴的で、外面には煤がこびりついて真っ黒な状態である。

3の堀の時期は出土遺物から15~16世紀と思われる。

16. 通 路（第16・36図、写真19・20・27~29）

③区の試掘調査時、3の堀から東へ約20m伸びている落ち込みが発見された。覆土の状態は北側がローム土

と黒色土の混ざる搅乱土が幅2～3m入っていて、その南は黒色土となっていた。また落ち込み東端の北東隅には小石多数が入る部分がみられた。そのうち本調査することとなり②区と3の堀北部調査終了後に内部調査を実施した。幅11.4mの堀状の堀込みの内部は北と南に法面があり、底の部分には北寄りに溝址があり、溝の南側の一段高い位置には道と思われるロームの平坦な面が併行してあり、この道の南側の南法面基部には石積みの跡が認められた。さらに石積みの下部には時期的に石積みより新しい水路址と思われる小溝が検出された。この溝・道・石積み等は東高西低の傾斜をもっており、東側上部から3の堀堀底に下る形となっていた。方向はS-83°-Eで3の堀とはほぼ直角に接続する。3の堀との時期の前後関係については確認できなかった。

これらの内部施設を含めて総称して何と呼称するか類例を知らず、ここでは仮に「通路」と呼ぶこととした。なお出土陶器等に関する詳細については本文末に付けた陶器及び須恵器一覧表をご覧いただきたい。

(1) 溝

通路内部の北側、北法面の下に掘られている。箱型の堀込み形で、幅は上部で300cm、中央部で240cm、下部の3の堀堀底付近で60cmと徐々に幅が狭まっている。深さは道との比高が30～40cmある。溝の内部は厚く砂が堆積し、溝の東半の底部には流れ込みによる多数の礫が入っていた。溝の東端上部には小石多数の入った溝状の落ちこみがあり北東に向かって消えていた。以上から当溝址は水路で、北東方向から引かれた水を溝址に落して3の堀堀底に流していたと考えることができる。

また溝址の中央付近の溝底には不整形な落ちこみがあり、水流によって掘られたものと思われる。この落ちこみ箇所から流れ込みによる遺物が出土している。図36-1～5は内耳土器で6～14は出土陶器である。6は小型の灰釉皿底部で底径5.5cm。7は灰釉壺の口縁部で口径11.8cm。8は推定口径17.8cmの灰釉碗で釉は浸け釉による。11～14は常滑のすり鉢で14の表面には布目が付く。15は小型の須恵器高杯と思われ脚部に3方から切れ込みが入っている。

(2) 道

通路の内部で溝址の南側に併行して、道とみられる西に9°傾斜する平坦なローム面が見られた。道幅は上部で270～300cmあり下部の3の堀手前3.6mの所では幅240cmとなり、ここから堀底までは傾斜が北西方向に変わっており、堀底までには10cm弱の段差がある箇所があつて、直接この道が下っている形ではなかった。

(3) 石積み

通路南法面の下部、道の南側に70cm以下の石が多数出土し、形状を明確にとどめていないが法面に付く2ヶ所で大きな石を組んであると思われる所があり、北法面の土留めのための石積みと判断した。この石積みについては図に点線で石の略位置を示したが、③区追加調査と工事工期の関係で堀内に重機を入れて排土せざるを得ず、実測することができず誠に遺憾であった。

崩れた石の間からは図37-1～7の遺物が出土している。1は内耳土器の内耳部。2は白い長石釉のかかる小型皿で口径11cm底径6cm高さ2.5cmを測る。4・5は常滑のすり鉢、6は黄色の灰釉がかかる鉢と思われる。

なおこの石積みのものと考えられる大きな石の上部では、比較的小さい石多数が東西方向で帯状に覆土に入つており、近代陶器が石の間から出土したことから、西の水田に水を引くための新しい時期の水路があつたこともわかつた。

(4) 水路

道部の南側に長さ6mに渡って、幅50～80cm深さ2～30cmで小石の入る小規模な溝状の落ちこみが見られた。法面とは間隔があり石積み基礎とは考え難く、道の側溝的なものともみることもできる。その場合は道幅は1.8mとなる。或いはある程度通路部が埋まった時点での水路の底の部分とみることもでき、その場合水路上の石積みの石は側壁部のものが落ちこんだものということになると思われる。

遺物は石の間からは、図38-1の推定径が29cm程の安山岩製石臼の下臼断片と、6～8のすり鉢破片が出土した。

(5) 柱穴及び段遺構

通路北法面の中ほどに柱穴が掘られている場所がある。柱間は156cmで東西に2つ並んでいて、両者とも径35cmで底形は方形で、深さは東の柱穴が56cm西が48cmを測る。この柱穴の上部には法面を削って平らにしている箇所がある。幅85cm長さ8mで東西に長いテラス状の平坦面となっており道を思わせる。柱穴は対岸の南法面には対応するものが無いので橋とは考えにくく、何らかの施設が通路に面してあった可能性があるが何であるかは不明である。

17. 柱 穴 (第4~6図、写真12・13)

柱穴と見られる小ピットが②区では408、③区では355、合計763検出された。図の中でピット番号を付けたものは遺物が出土したもののみである。郭内部であり中世に属する柱穴が主体となると思われるが、②区では搅乱の度合いが高く、また柱穴をつなぎ掘立柱建物址を検討する時間がもはや無く、図中で柱穴の深さを示すこともできず、責任を痛感する次第である。

柱穴の形状は隅丸長方形と円形のものが多く、隅丸長方形の柱穴の覆土は黒茶褐色土で中に炭粒を含むことが多く、不整形のものは覆土が暗茶褐色土であるという傾向が見られた。②区西部には柱穴の底に平板な石が入る柱穴や底に固い黒色土の入る隅丸長方形の柱穴があり、地元の人の話では②区西部付近に近世か近代頃屋敷があったと聞いているとの話があったので、その家のものであろうか。また円形のものなど縄文時代に属するものも混じっていると思われる。

なおピット中から出土した遺物は第39図の通りであるが、14は宗銭「皇宗通寶」で第3号住居址西側の小ピットから出土している(第5図に図示)。

第Ⅳ章 おわりに

今回の発掘調査は急きよ実施することとなった市道工事に伴う緊急調査であり、調査内容について十分な検討をする時間が無く詳述もできないため、以下の通り調査結果と中世稻村城に関する若干の記述をもってまとめにかえたい。

1. 今回の調査結果

②区では、水田の造成時に地山を掘削し建築物の廃材などが埋立てられており、大部分遺物包含層は破壊されていたが、一部の遺構の下部の部分が残されている状況であった。今回の調査で検出された遺構は、縄文時代等の各期にわたる土壙が27基、縄文時代の住居址の炉と思われる炉址2、弥生時代の住居址3軒、古墳時代の住居址1軒、小豎穴址1基、中世の堀1・豎穴2(堀部1、郭内1)、その他時期を特定できない柱穴・小ピット763、溝状遺構3、特殊遺構1、焼土ピット1基、及び「通路」と仮称した堀に直交し堀底に向かって傾斜する堀込み(道路、溝、水路跡、土留めの石積みをともなう。)などである。

2. 中世稻村城について

(1)城の構造について (第3図)

通常、図の①を含む縄張りを本郭あるいは外城、②を二の郭あるいは本郭などと呼称するのが普通であるが、①の西から段丘突端までの地域や、②の南側の状況が不明であるので、今回の調査では調査地区①～③の名称を使用することとした。また堀に関しても1の堀～3の堀の名称を調査では使用したが、1の堀については段丘下へ通じる市道の西側に段差があったとの話を地元の人から聞いたので仮定したのみで、堀の存在は現状で確認されているわけではない。以下西から順に各部を見ていくこととする。

1の堀は上記の理由に加えて、①の郭の西に土壙があった点と、市道開鑿を別にしても天王川左岸の崖が南に入る感があることから考えて堀の存在を仮定した。

①の郭は古くから城跡として知られていた区域で、①区の中を切っている市道は近年の工事によるものなので、もし1の堀が南北方向のものであれば長方形に近い郭ということになる。また現在、郭の北東の墓地と2の堀の間に高さ2m程で南北に長い形で土壙の一部が残っている。地元の人の話では郭の西側と北側にも土壙の跡があったというが現状では平坦になってしまっている。

2の堀の北側はV字形の深い堀形がよく残っており、南側も現在は埋められているが南に堀跡が続いているという。また堀の両側には土壙があった。

②の郭は2の堀と3の堀の間の大きな郭で、東西の幅は最大で約80mある。南限は確認されていないが、調査区南の水田と民家との間に窪地が東西に伸びていたとの地主の話から、堀か溝で区切られていた可能性があり、そうすると台形に近い形の郭形ということになる。2の堀の東には昔若宮の祠があったという小高い場所があり、土壙の痕跡である。土壙の東は南北方向の窪地となっており調査区の南西隅まで続いているようで、東西方向の排水のための溝と思われる。

3の堀は調査前、北側はV字形の堀形をのこしていたが南側は埋められており、昔は墓地付近まで窪地が続いていたという。また近年まで堀の底は段丘下と通じる堀底道として利用されていた。地元の人の話ではこの堀底道は市道の手前で直角に折れ曲がって続いていることで榾型に似た形であったようである。

③の郭は3の堀の東で、南限と東限が確認されていないので区画された郭かどうか不明であるが、調査区東に段差があることと、「北の城」という地名から考えて一応郭としてとらえた。

ところで現在、伊那森神社の南の市道沿いには民家が連なってあり集落を形成している。同一段丘面にある

稻村古城一段丘面上にある稻村古城の西に「裏木戸」東には「大手」地名が残されていることからすると、この本村路下集落は、古くから集落の形が残ったものするならば稻村城の城下町とみた方が自然と思われる。

稻村城跡の東方には伊那森神社がある。創立年代は不詳だが、飯島町の石曾根の諏訪社とともに仁徳天皇の頃分霊したと諏訪社の旧記に記されており、郡内でも最も古い神社の一つであるとされている。

城跡の北東方には臨済宗妙心寺派の大藏寺がある。山号は法性山を称し、由緒は天正5年(1577年)9月創立とされる。

以上城跡の構造を推測を交えて見てきたが、今回の調査で②区と③区内部には中世の遺構が存在し、3の堀も明確な堀であったことが確認できたので、稻村城は少なくとも東西に170m以上の広がりをもつ、中世の連郭式の城であったということができると思われる。

(2) 城跡の名称と付近の地名について

現在の遺跡名は稻村城跡、稻村古城跡となっているが、現稻村城古城は稻村城、現稻村城は若宮の祠があつたことから「若宮城」と呼ばれていたことがある。

調査前、現在残されている土地台帳から城付近の地名調査を行っている。伊那森神社の東の小字名はほぼ「宮下」で、①区の一部に「城の畑」の地名が見られ、天王川の河原は「ガラン」または「カラム」となっていた。その後現場調査をする中で地元の人に教えていただいた呼び名があったので記述しておく。③区のある田は「北の城」で、3の堀の堀底道は「はなもりこうじ」と呼ばれていたという。

(3) 稲村氏について

現在「稻村」を名乗る家は無いが、過去に当地付近に稻村氏が居て稻村城の城主であったと言い伝えられている。過去の文献をみると、山梨県の恵林寺文書の中の下條頼安、徳川家康に対する天正10年(1582年)7月6日の起証文の「中脇(ママ)衆起証一紙」に記された10名の中に「稻村源四郎」の名がある。ほぼ同じ内容の起証文は内閣文庫所蔵文書の中にもある。

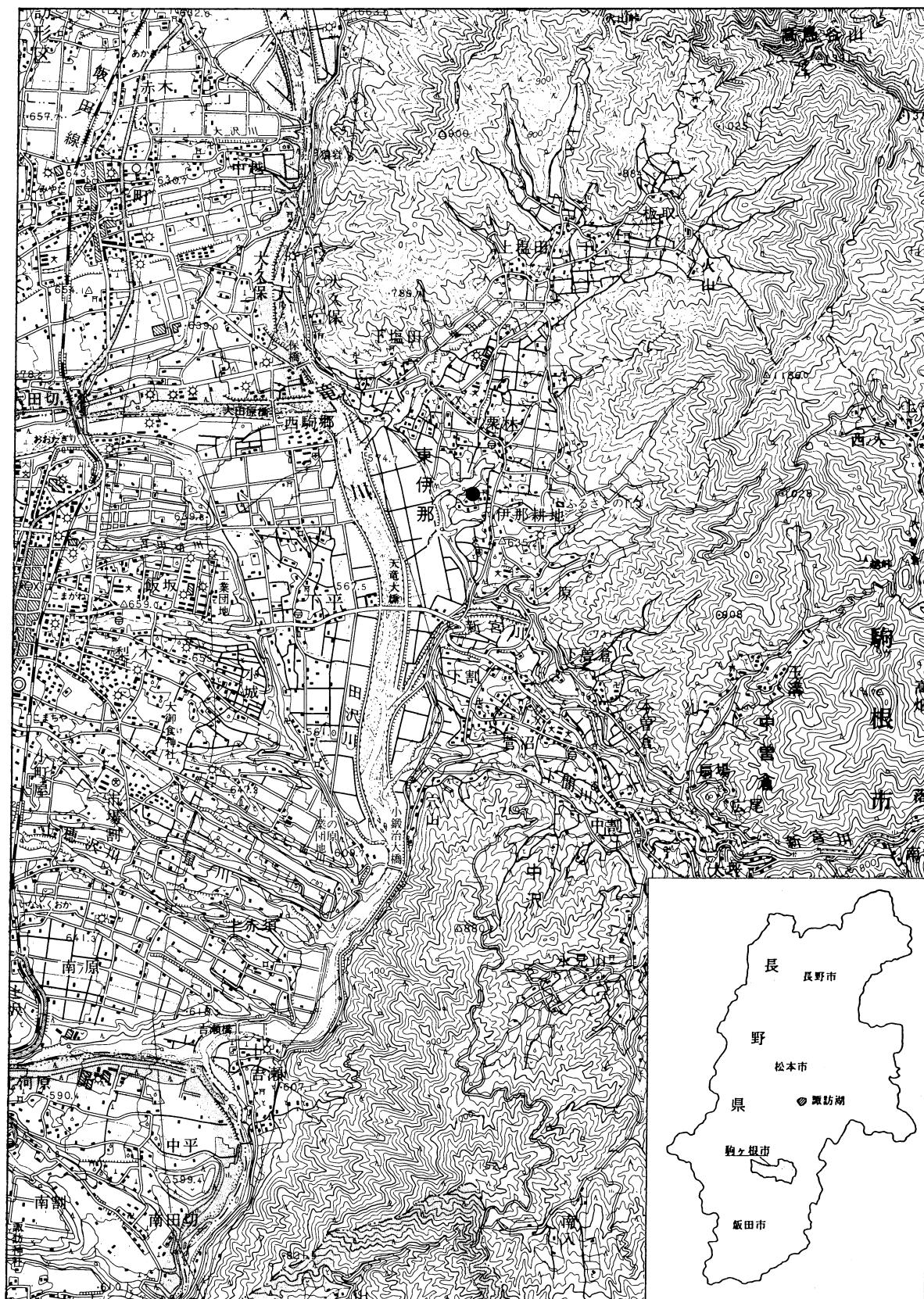
また「新編會津風土記」中、永禄四年(1561年)武田信玄が知行を行った「高遠之新衆」の一人に「稻村弥五郎」の名が見られる。

参考文献 信濃史料刊行會『信濃史料』第十二卷(昭和33年)、第十五卷(昭和35年)、補遺卷上(昭和44年)

最後に、調査に深いご理解をいただき協力していただいた駒ヶ根市及び工事関係業者、地元の各位、また調査をご指導下さった友野団長はじめ、地質調査をしていただいた寺平宏先生、残暑厳しい時期から降雪をみるまで発掘調査に参加していただいた調査団の皆様に心より感謝し本報告をおわりとしたい。

稻村城跡出土陶器及び須恵器一覧表 (No.は写真図版番号に対応する)

No.	実測図番号	出土場所	名称・器型	部位	年代	備考
1	37図7	通路溝東端	灰釉壺	口縁部	16C	室町 大窯期 濱戸
2	"図8	"溝	灰釉碗		15C	室町 窒窯期
3	"図6	"溝東端	灰釉碗	底部	16C	トチン痕
4	"図9	"溝P2	すり鉢	口縁部	15C	常滑
5	"図10	"溝東端	"	"	15C	
6	"図11	"溝	"		15C	
7	"図12	"溝東端	"		15C	
8	"図13	"溝中央P	"		15C	
9	"図15	"溝P2	須恵器高杯		平安初	
10	"図14	"溝東端	須恵器甕		平安初	夕タキ目
11	"図2	"石積み	白釉皿		16C	長石釉
12	"図3	" "	須恵器甕		奈良末	夕タキ目
13	"図4	" "	すり鉢		15C	常滑
14	"図5	" "	"		15C	"
15	"図6	" "	灰釉碗	底部	14~15C	
16	38図2	"法面上部	すり鉢		15C	
17	"図3	"南側法面	染付皿	底部	江戸	吳須絵 濱戸
18	"図4	"北法面西	須恵器甕	"	9~10C	
19	"図12	1住上面	鉄釉甕		16C	濱戸
20	"図11	3の堀西法面	甕			施釉なし
21	"図10	③区南西部	天目茶碗		15C	室町
22	"図9	1住上面	"		15C	
23	"図8	通路南水路	すり鉢		15C	常滑 底部糸切痕
24	"図7	" "	"		15C	" "
25	"図6	" "	"		16C	" "
26	"図5	②区P35	白釉皿		16C	長石釉
27	40図1	"土壤8上	甕	底部	15C	室町
28	"図2	③区竪穴底部	すり鉢	"	15C	常滑 底部糸切痕
29	"図3	"上部	"		16C	" "
30	"図4	" "	灰釉皿		15C	小型
31	41図8	③区南西部	すり鉢	口縁部	15C	常滑
32	—	通路溝P2	"	"	15C	"
33	—	"南側法面	"		15C	"
34	—	"石積み	鉄釉甕		15C	内無釉
35	—	"溝東端	灰釉	口縁部	15C	
36	—	" "	"		16C	
37	—	③区南西部	天目茶碗		15C	
37	—	通路溝東端	須恵器		平安初	
39	—	1住北半	鉄釉甕		15C	内無釉
40	—	②区P47	須恵器甕		平安	
41	—	1住上面	灰釉		15C	
42	—	2住炉南側	"	口縁部	15C	
43	—	②区5-B	甕		15C	内灰釉、外無釉

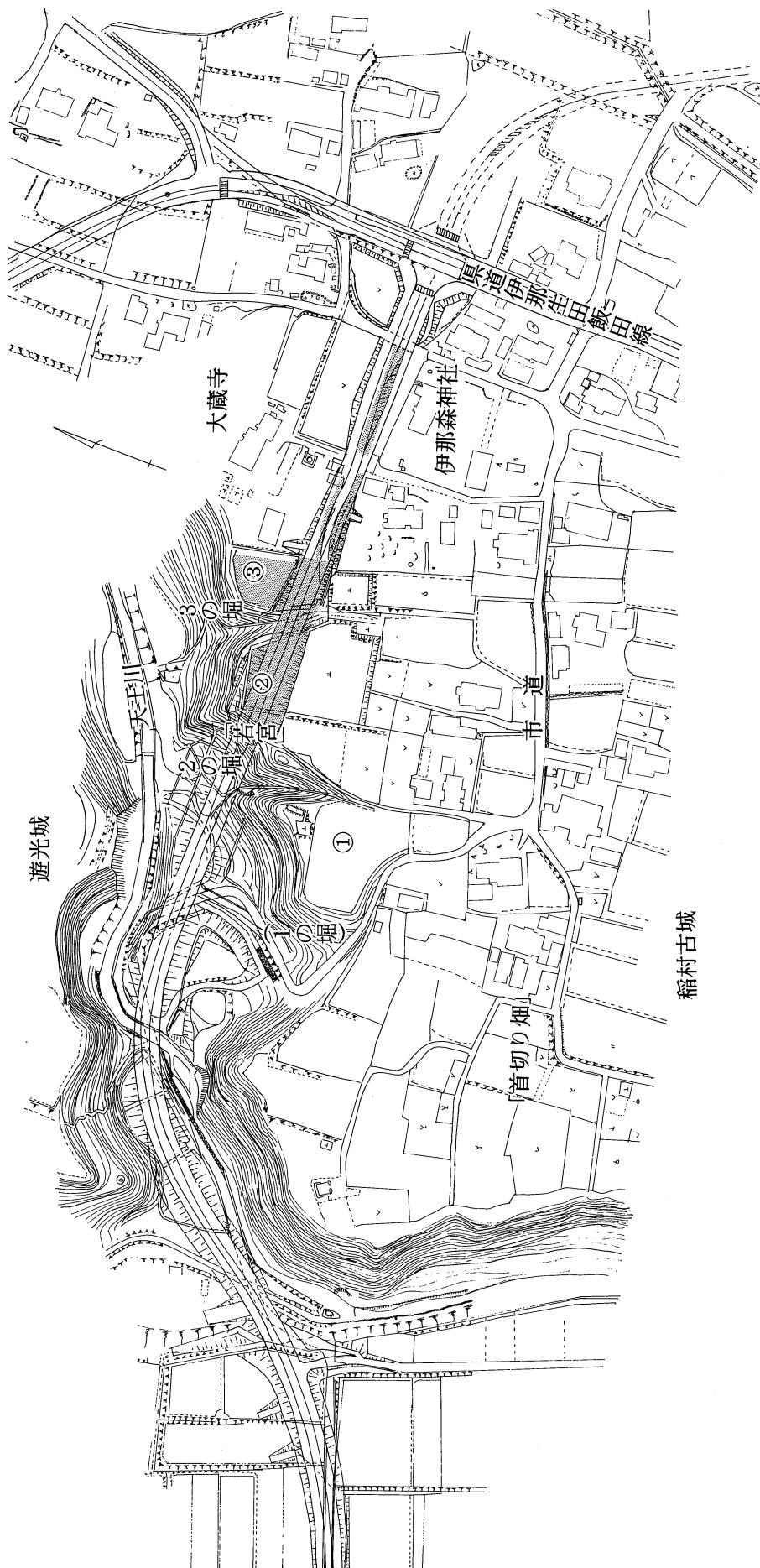


第1図 稲村城跡位置図 (S=1:50,000)

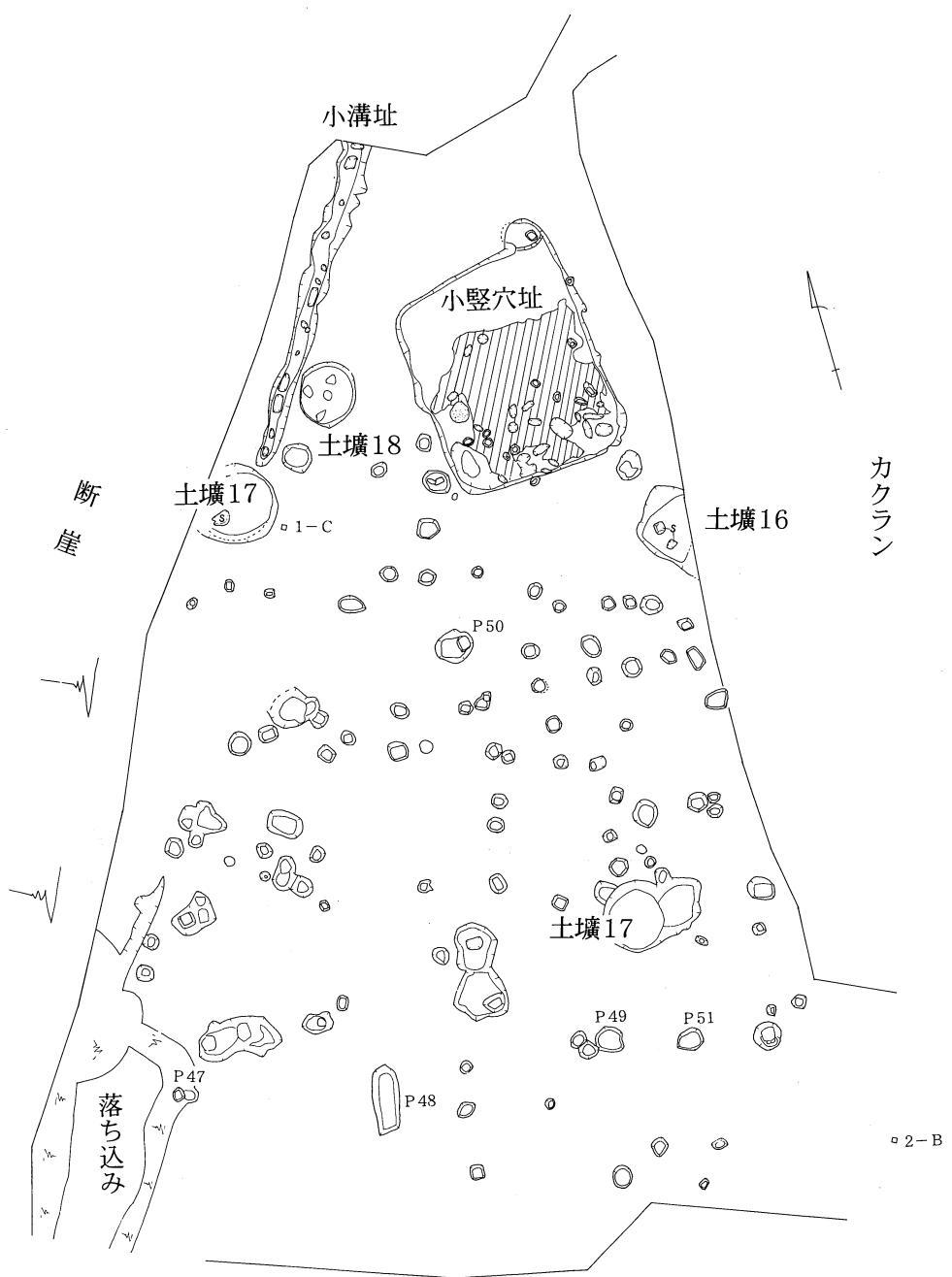


- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1. 稲村城 | 9. 山田 | 17. 遊光城 |
| 2. 丸山 | 10. 大久保北 | 18. 高田城 |
| 3. 遊光 | 11. 上塙田 | 19. 大久保城 |
| 4. 反目南 | 12. 青木北 | 20. 城村古城 |
| 5. 反目 | 13. 殿村 | 21. 城村城 |
| 6. 垣外上 | 14. 原城 | 22. 青木城 |
| 7. 善込 | 15. 稲村古城 | 23. 青木畠 |
| 8. 栗林神社東 | 16. 狐久保 | 24. 箱 |

第2図 稲村城跡周辺遺跡位置図 ($S = 1: 25,000$)



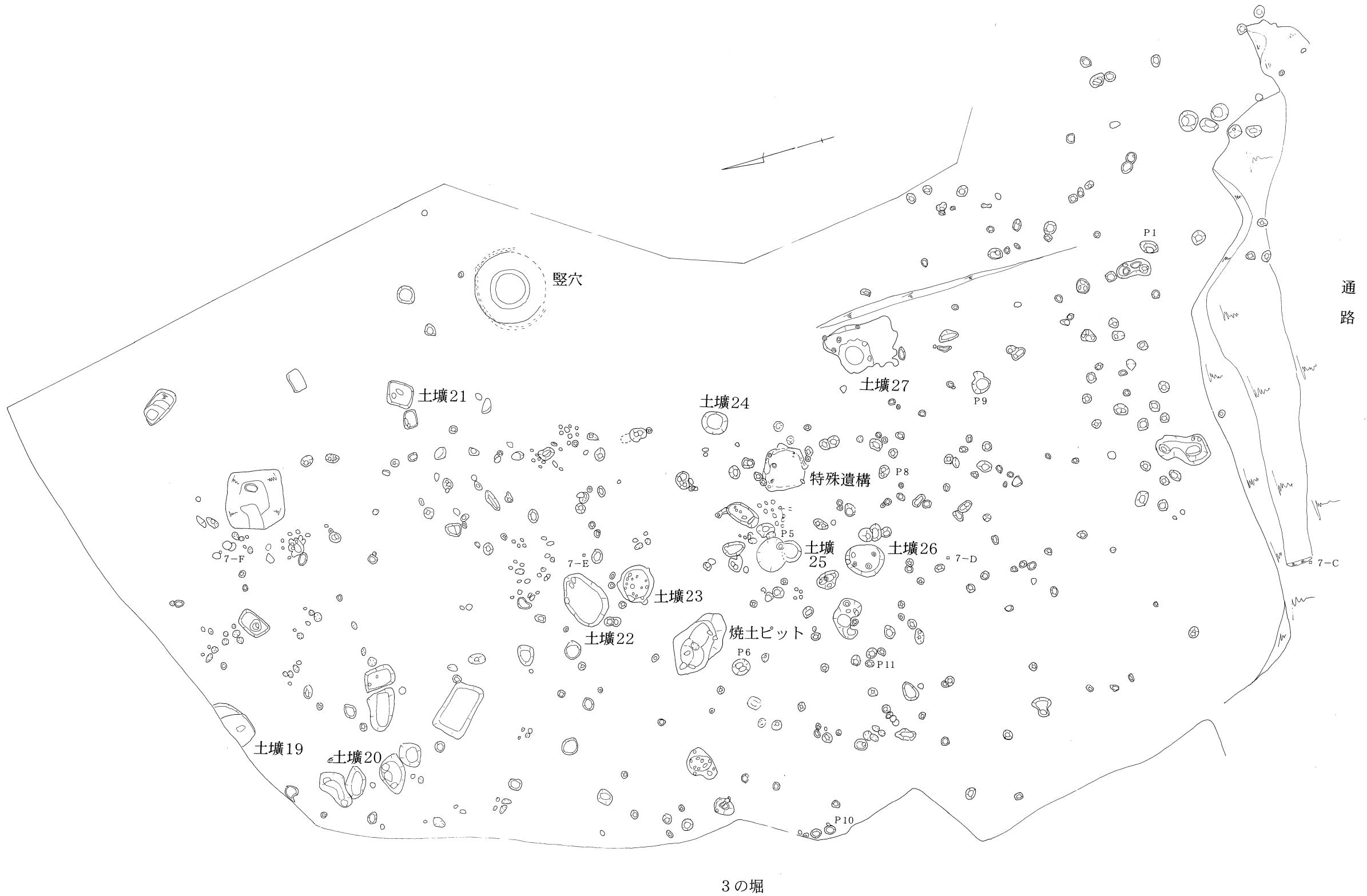
第3図 稲村城跡調査区位置図 ($S = 1:3,000$)



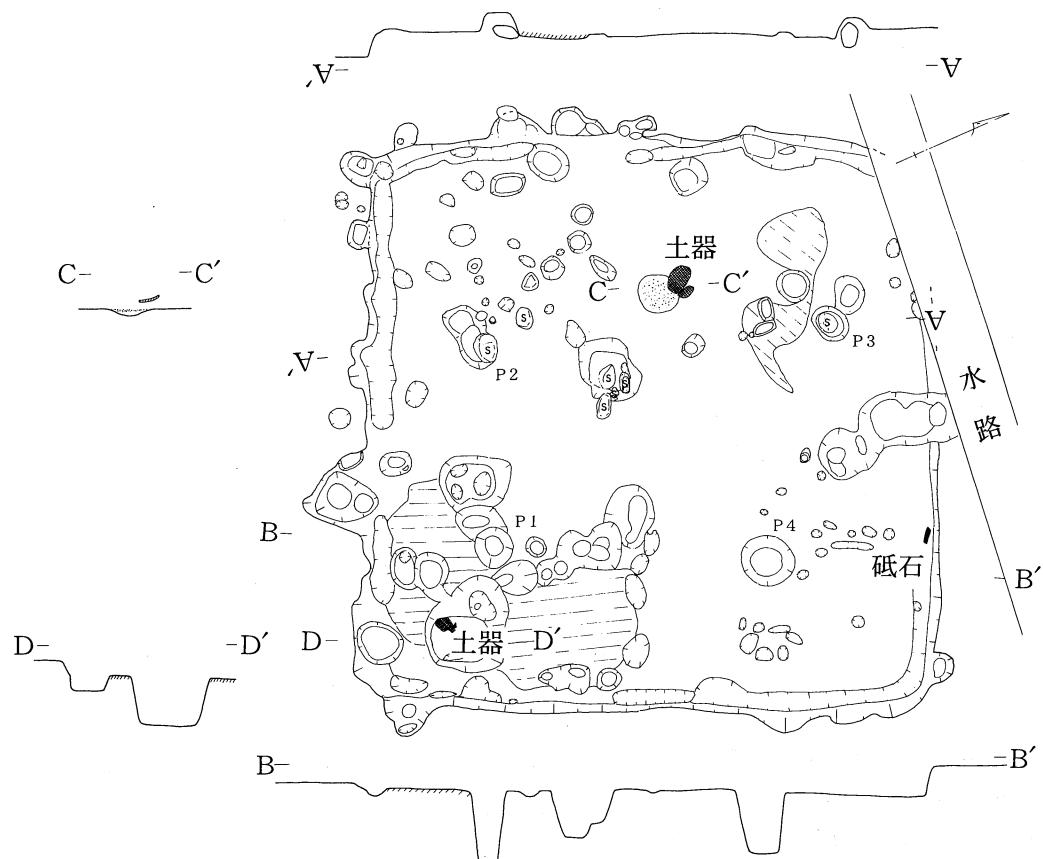
第4図 ②区西部遺構全体図 ($S = 1:120$)



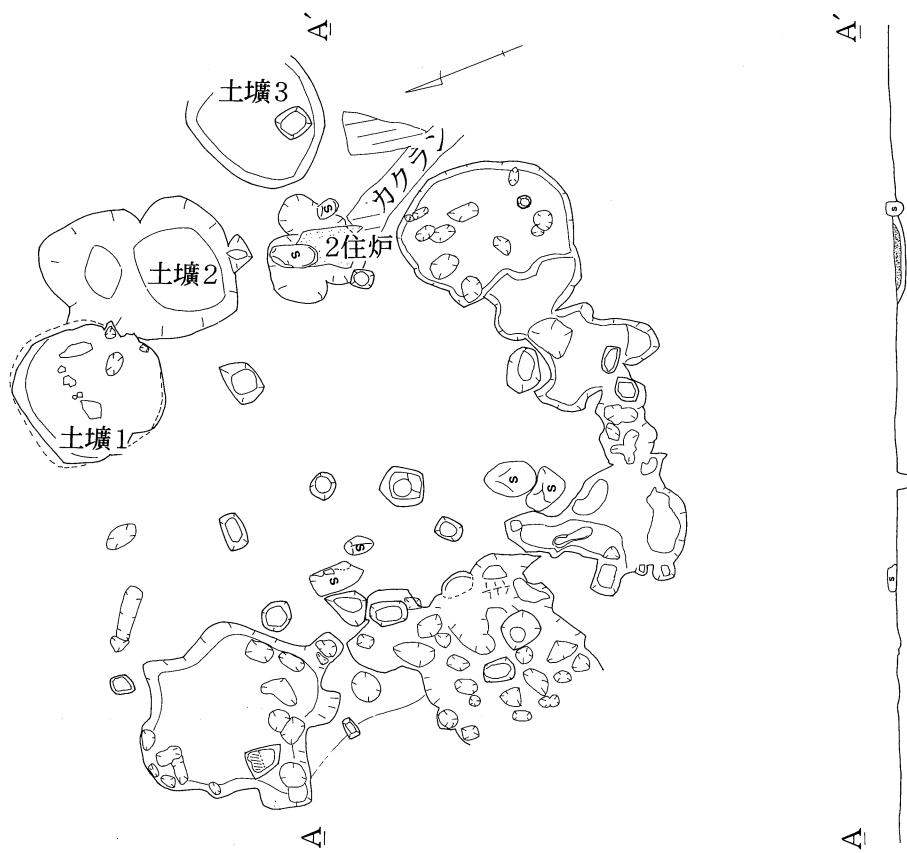
第5図 ②区中央部・東部遺構全体図 (S=1:120)



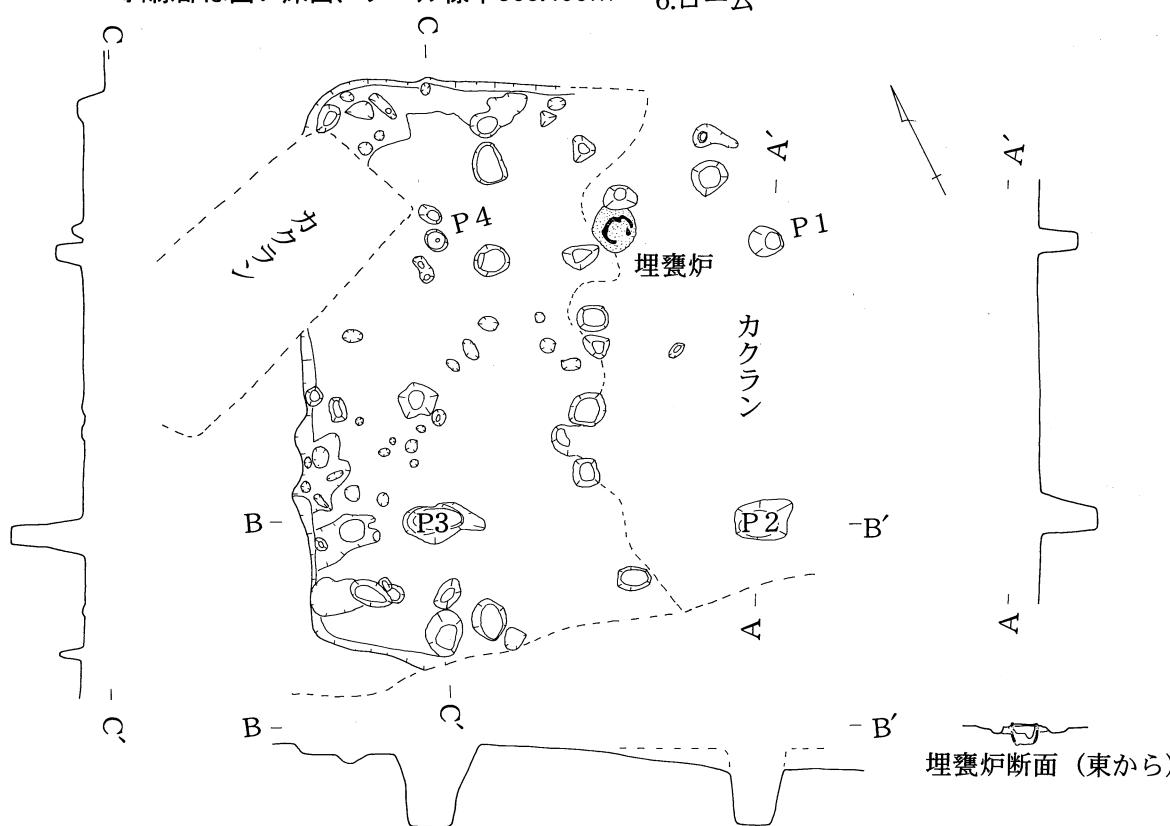
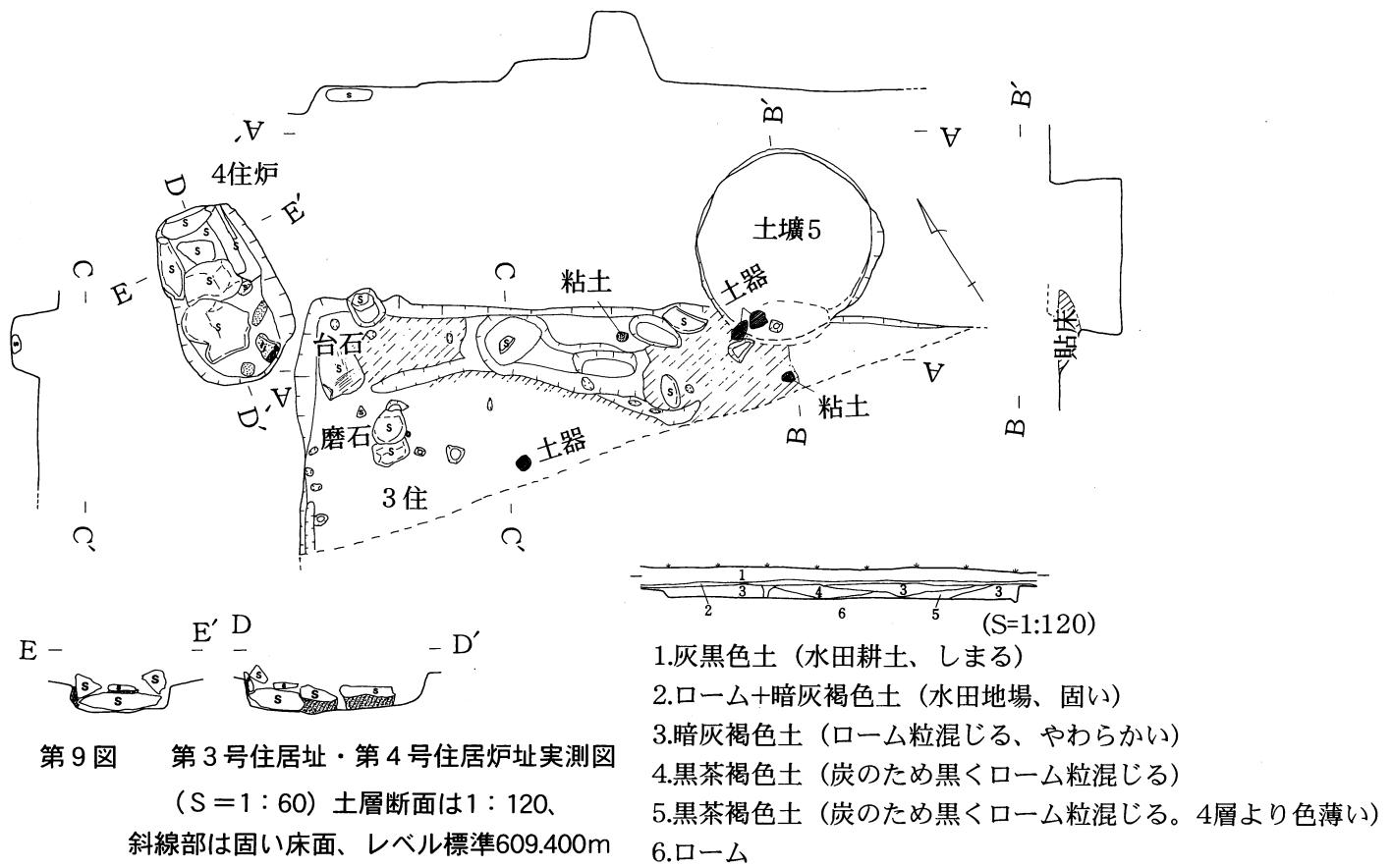
第6図 ③区遺構全体図 ($S = 1: 120$)

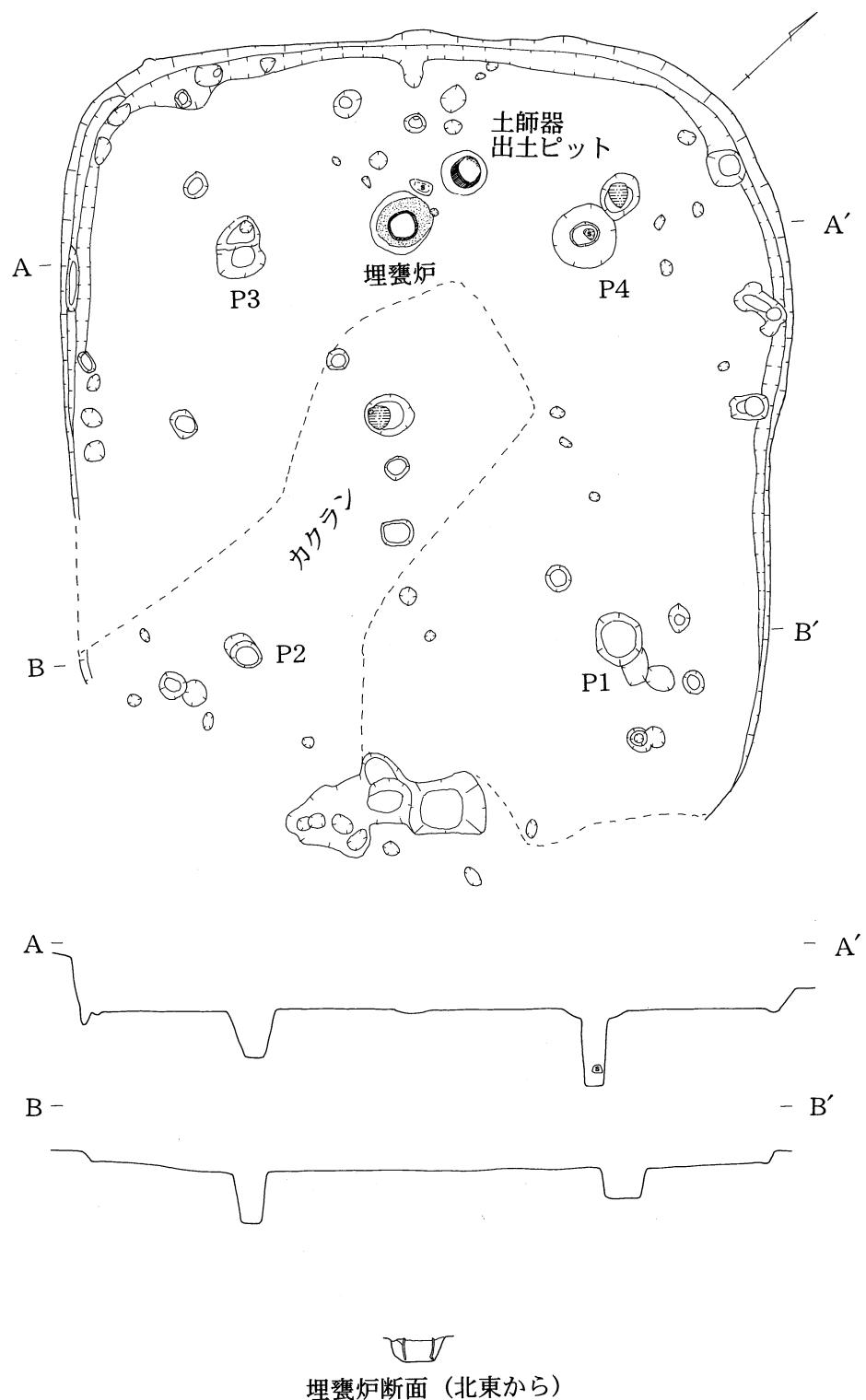


第7図 第1号住居址実測図 ($S = 1:60$) レベル標準609.300m、斜線部は床面が固い部分を表す。

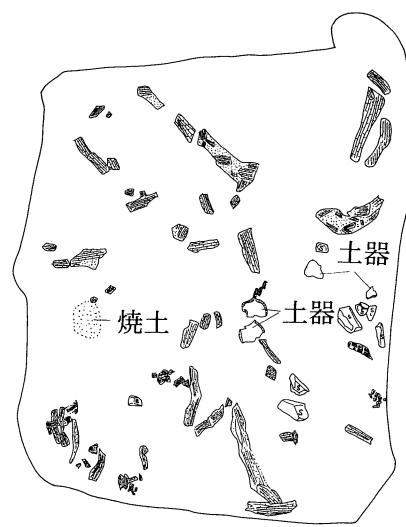
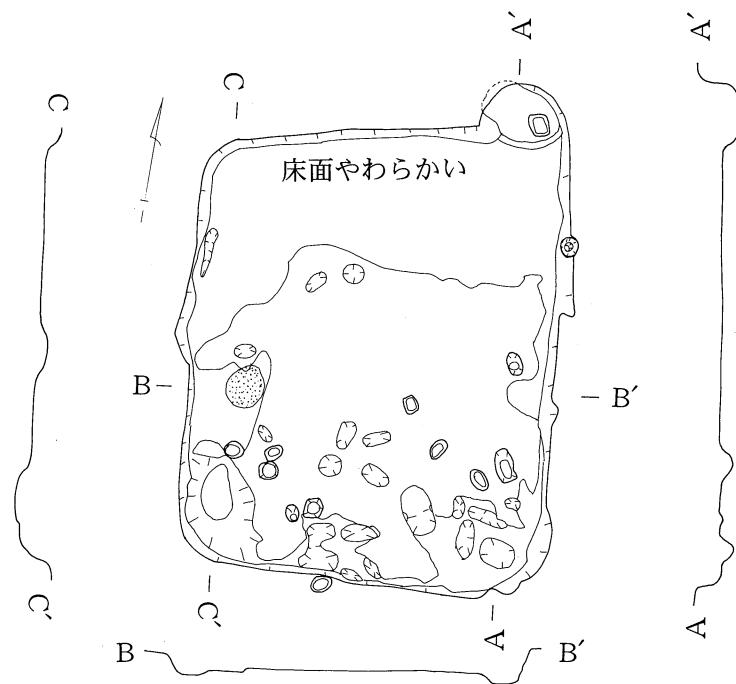


第8図 第2号住居炉址及び周辺実測図 ($S = 1:60$) レベル標準609.500m



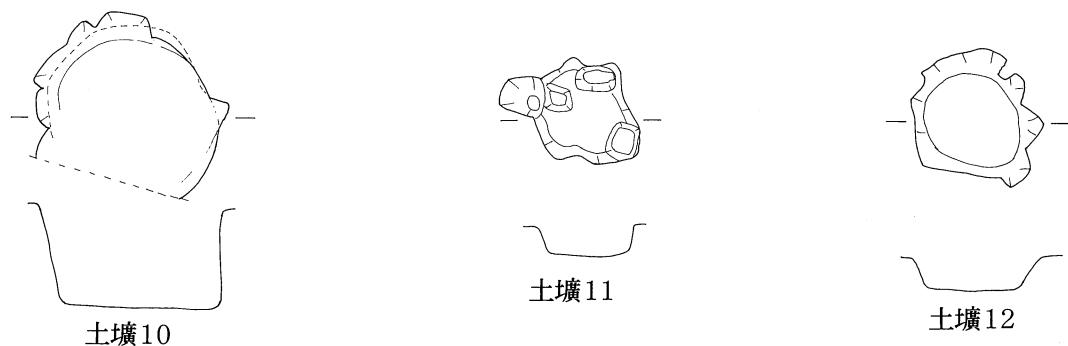
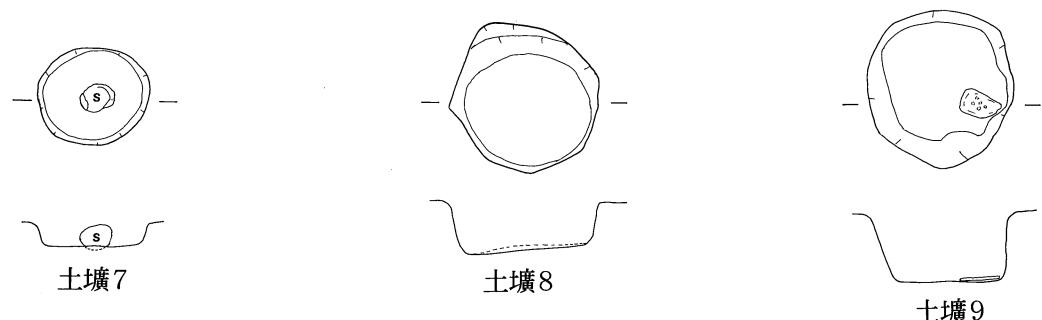
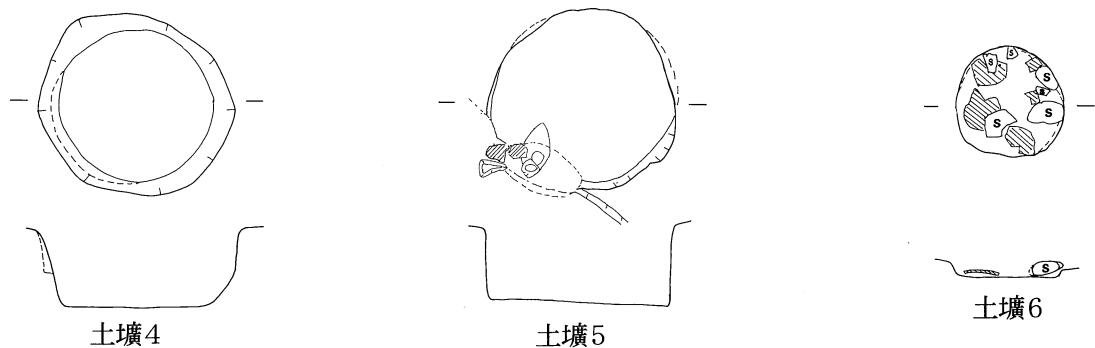
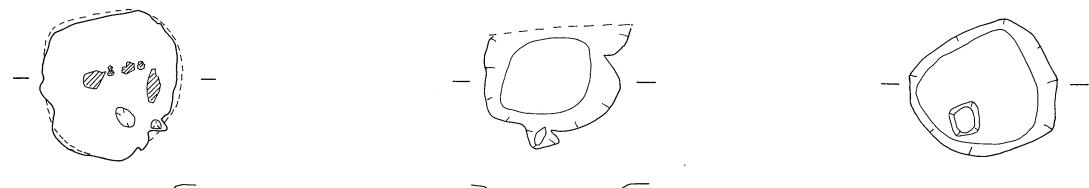


第11図 第6号住居址実測図 ($S = 1:60$) 破線部分は柱穴底が固い部分、レベル標準609.100m

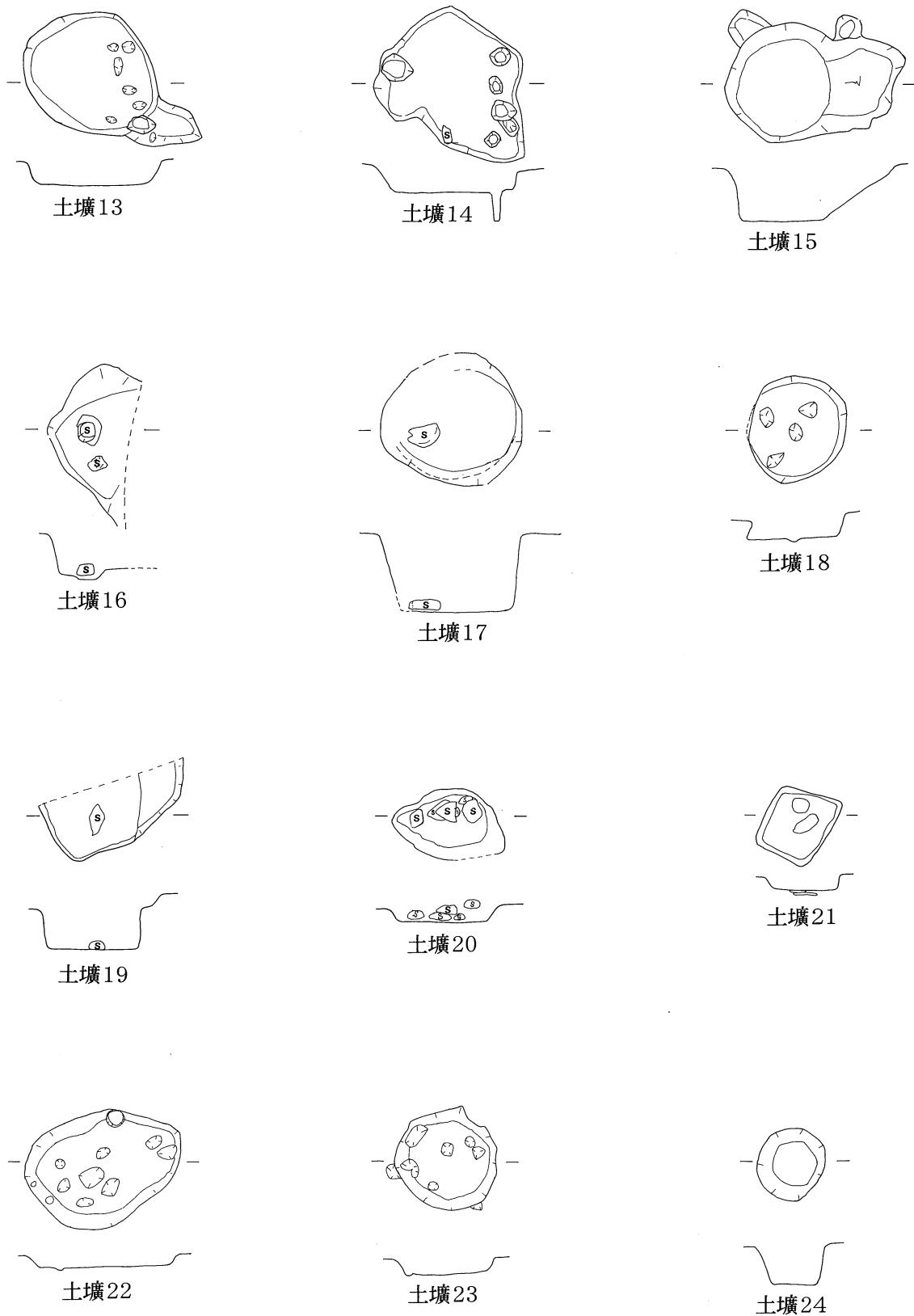


小竪穴址炭化材・遺物出土状況

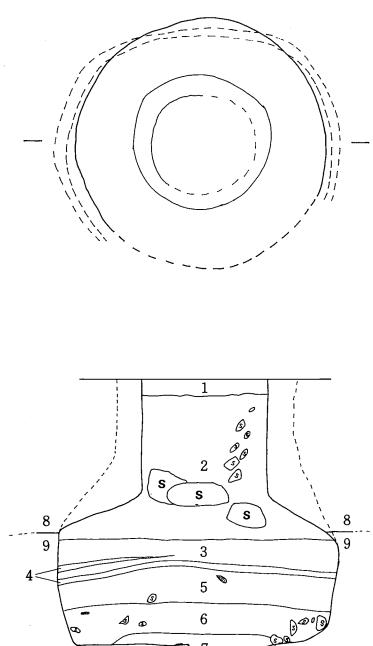
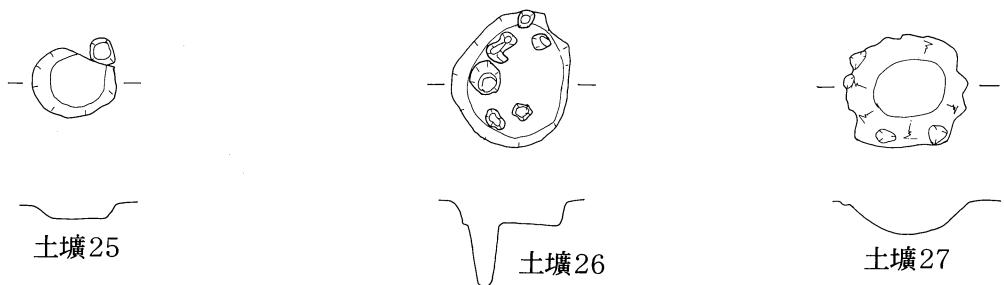
第12図 ②区小竪穴址実測図 ($S = 1 : 60$)



第13図 土壙 1～12実測図 ($S = 1:60$) 方位上が北、斜線部は土器



第14図 土壌13～24実測図 ($S = 1 : 60$) 方向は上が北

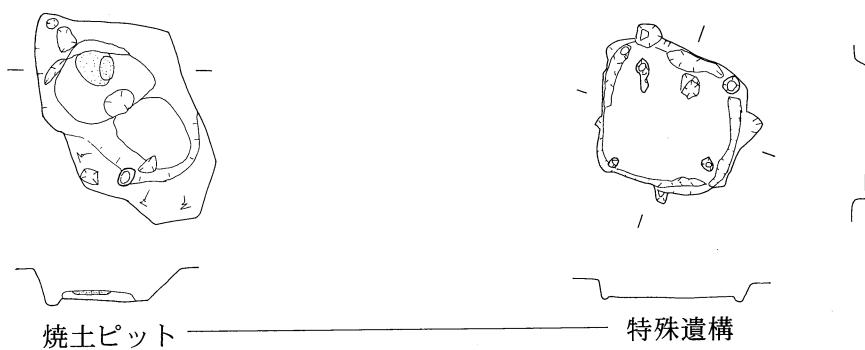


③区堅穴

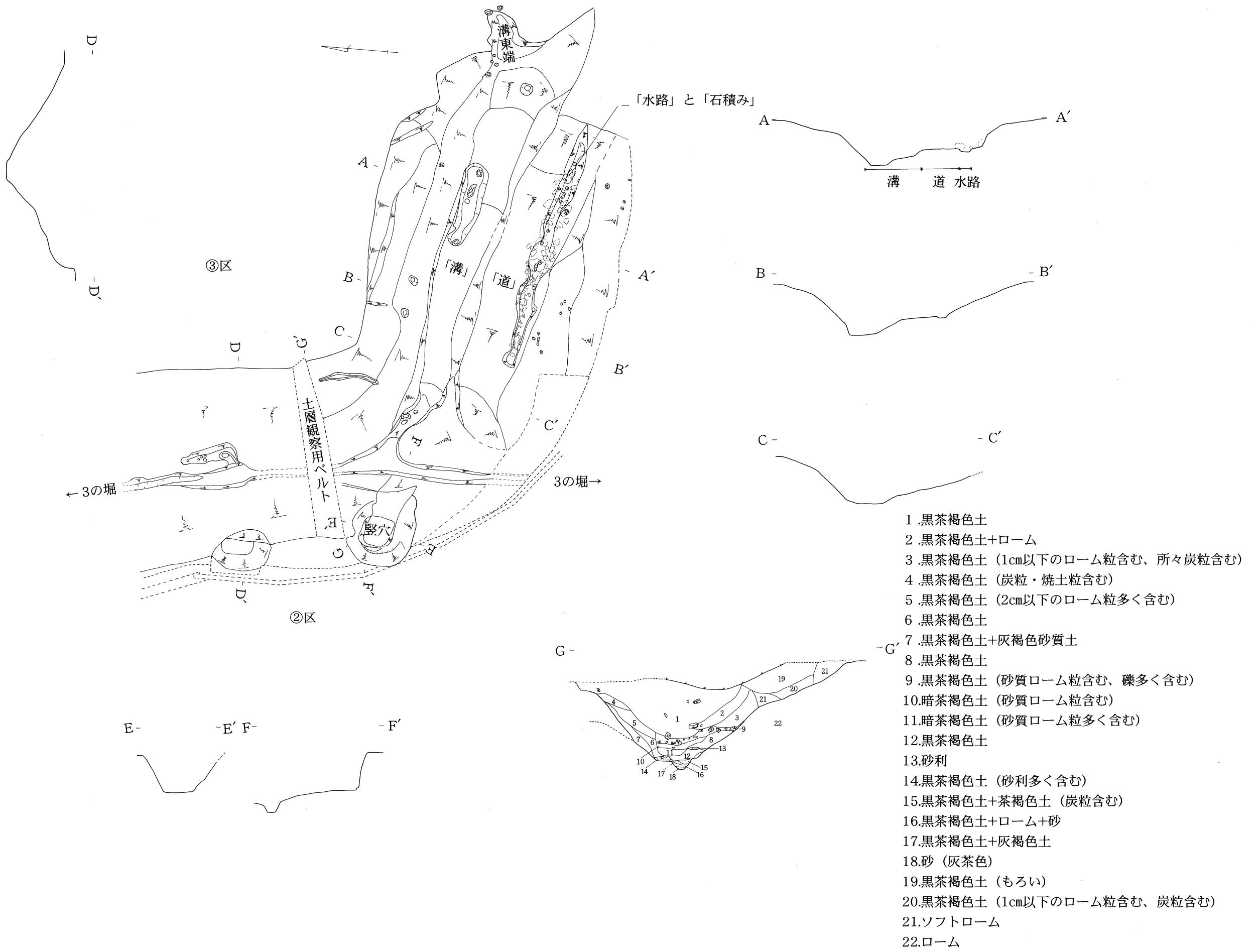
[③区堅穴覆土層位]

1. 黒褐色土（固い）
2. 黒茶褐色土（やわらかい）
3. 暗灰褐色土（1mm以下のローム粒含む）
4. ローム+黒茶褐色土
5. 黒茶褐色土（ローム粒所々含む）
6. 黒茶褐色土（1cm以下のローム粒多く含む）
7. 黒茶褐色土（砂質でないローム粒所々含む）
8. ローム
9. 砂質ローム

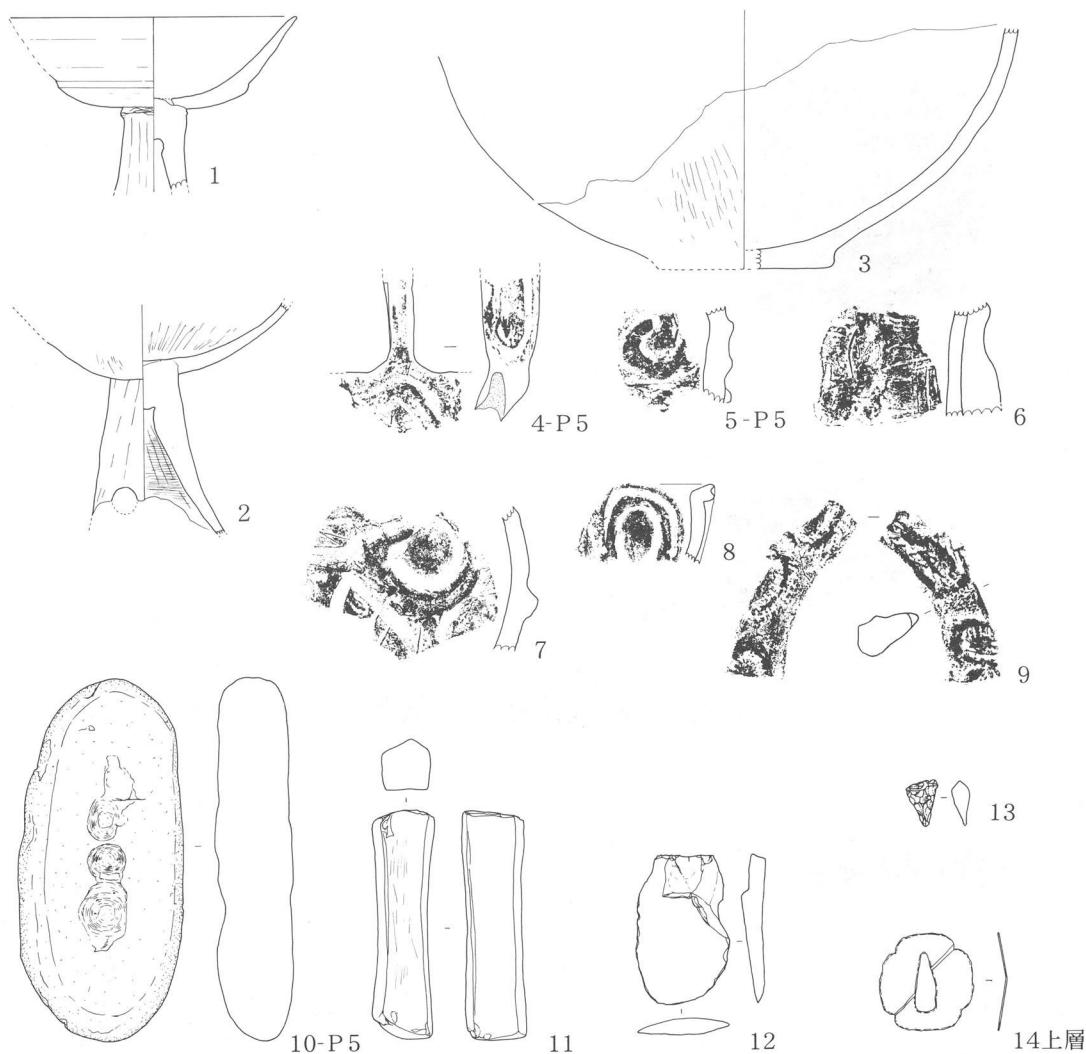
注：3・5・6層は炭化材と焼石（30cm以下で
10cm大位のものが多い）を含む



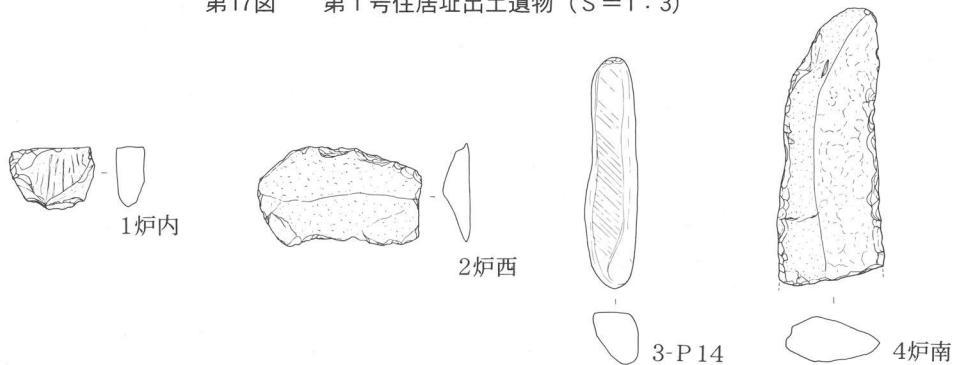
第15図 土壌25～27・③区堅穴・焼土ピット・特殊遺構実測図 ($S = 1:60$) 方向は上が北



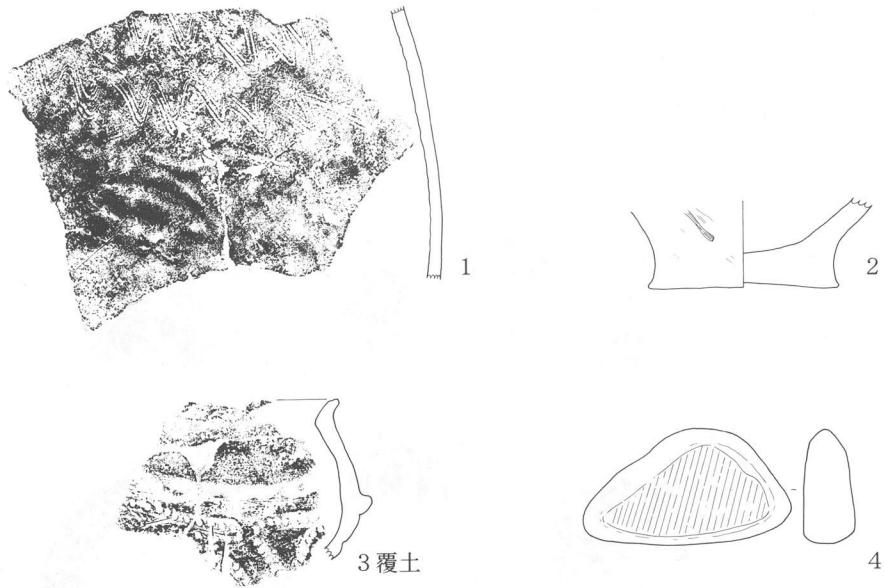
第16図 ③の堀・通路実測図 ($S=1:180$ 、G断面のみ $S=1:120$)



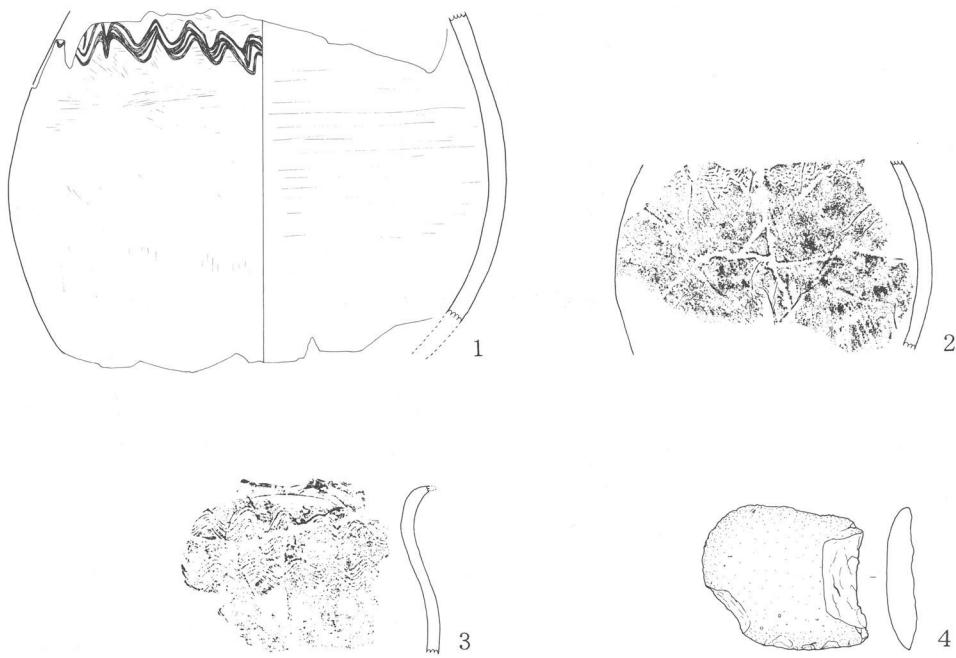
第17図 第1号住居址出土遺物 ($S=1:3$)



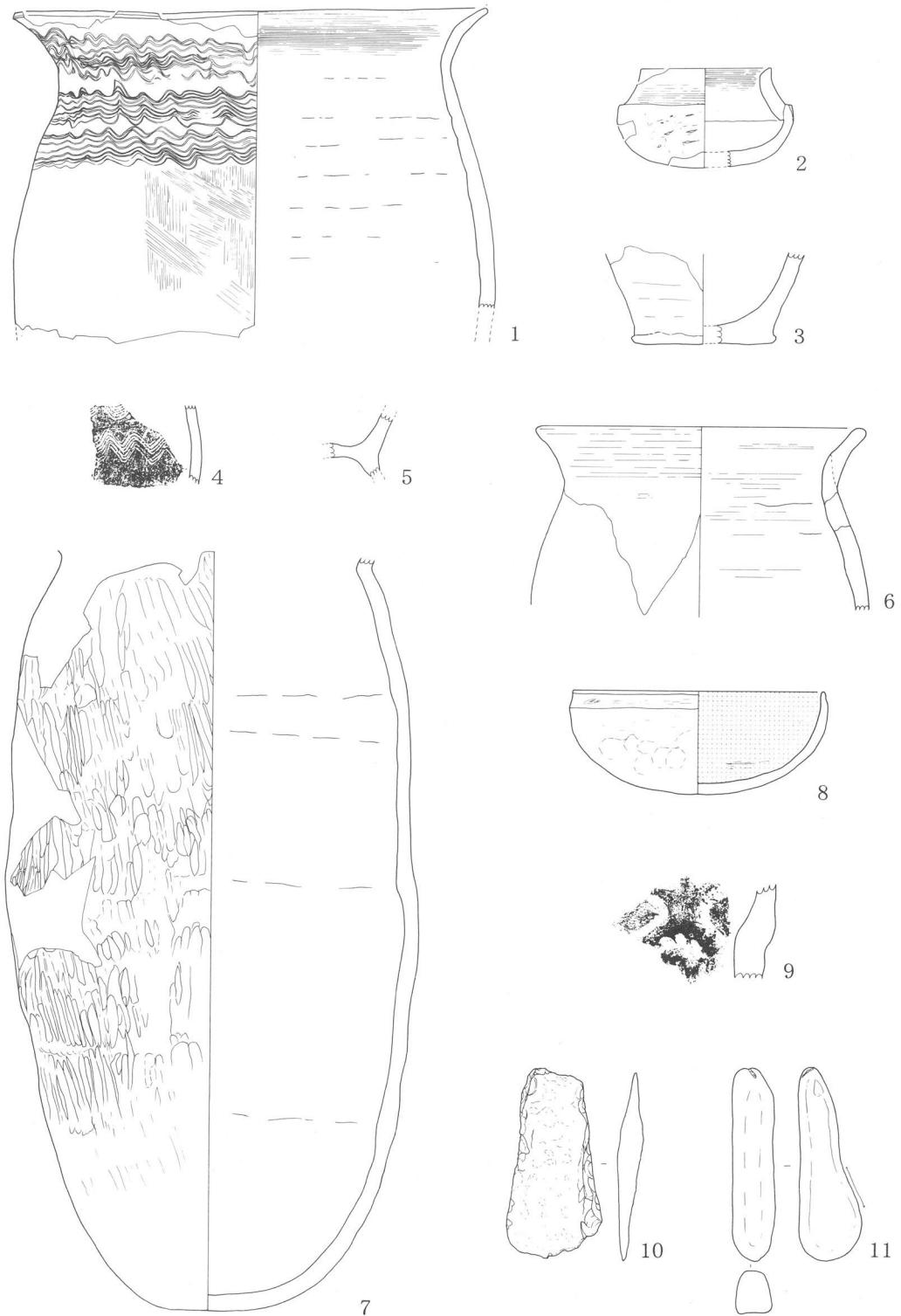
第18図 第2号住居址出土遺物 ($S=1:3$)



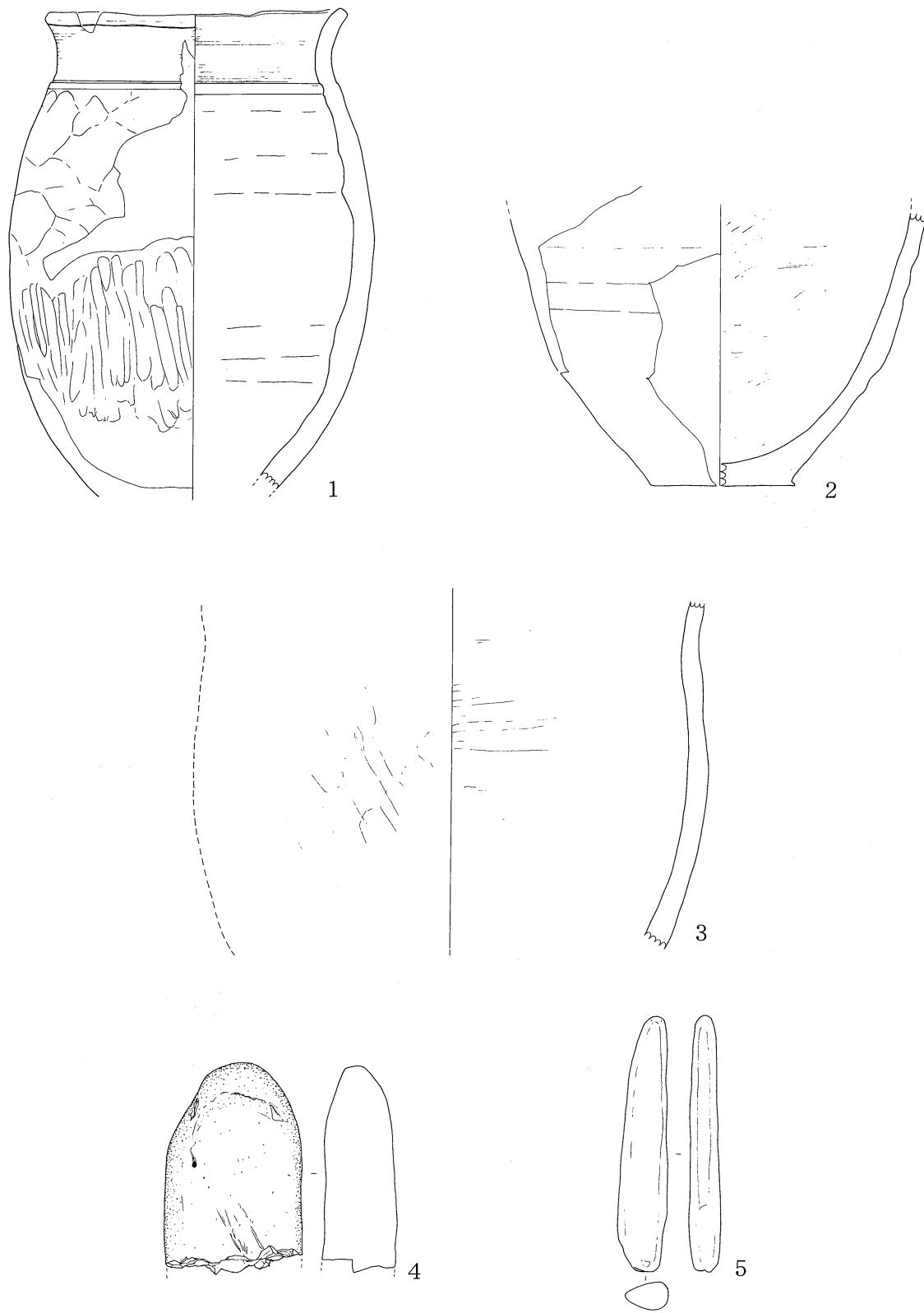
第19図 第3号住居址出土遺物 ($S = 1:3$)



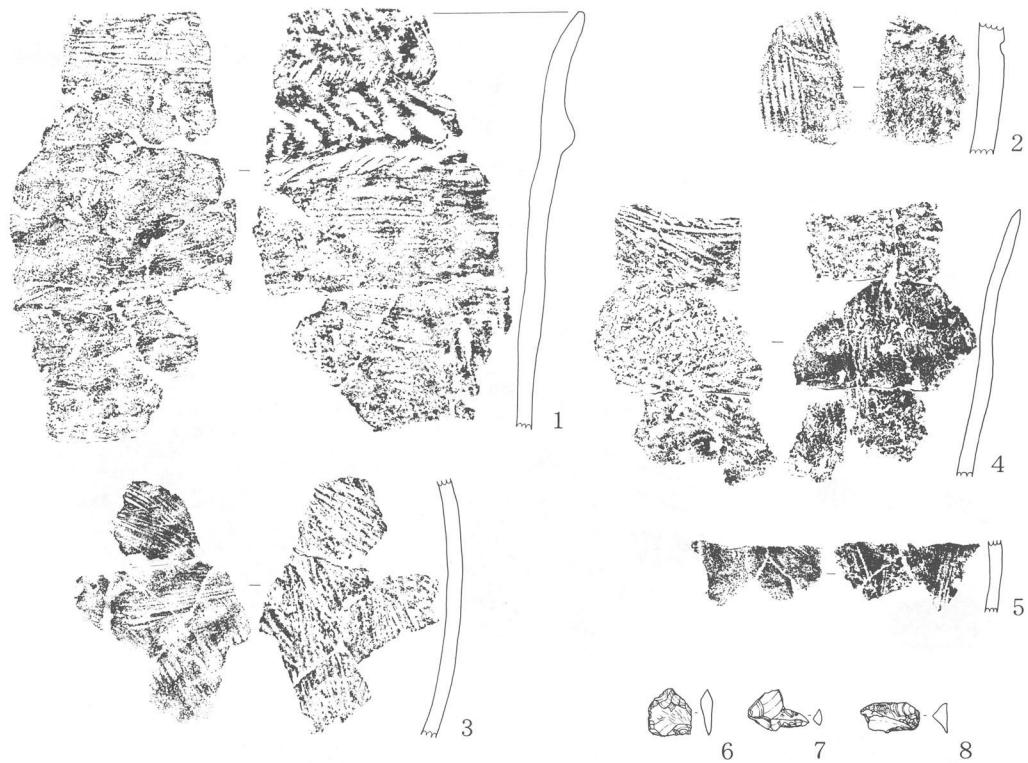
第20図 第5号住居址出土遺物 ($S = 1:3$)



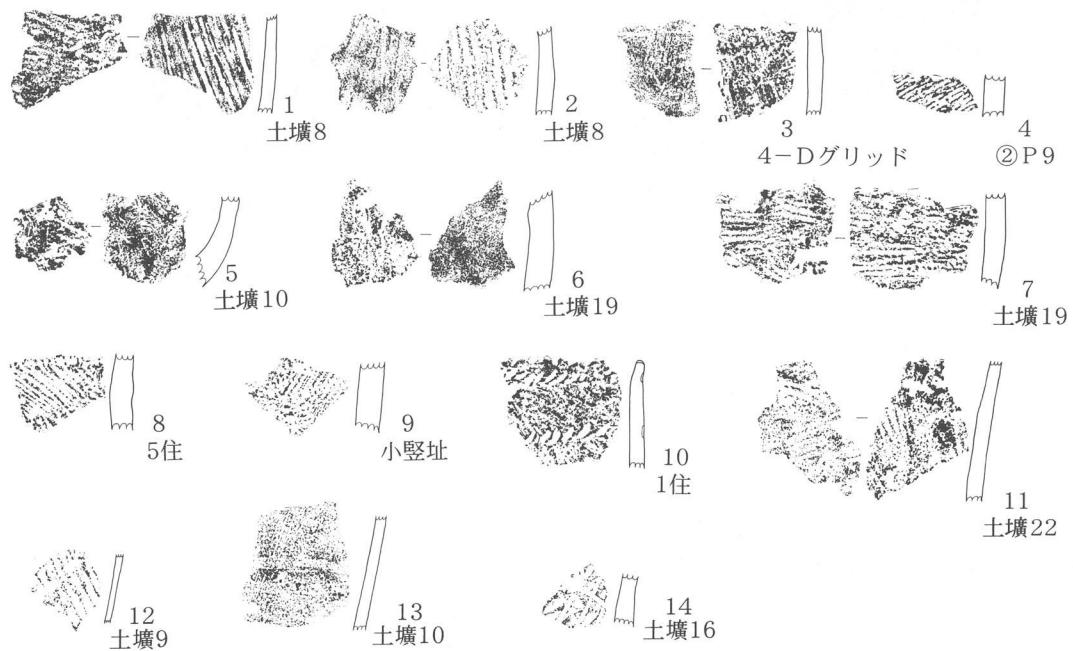
第21図 第6号住居址及び覆土中ピット ($S=1:3$) 図中7・8は覆土中ピット出土



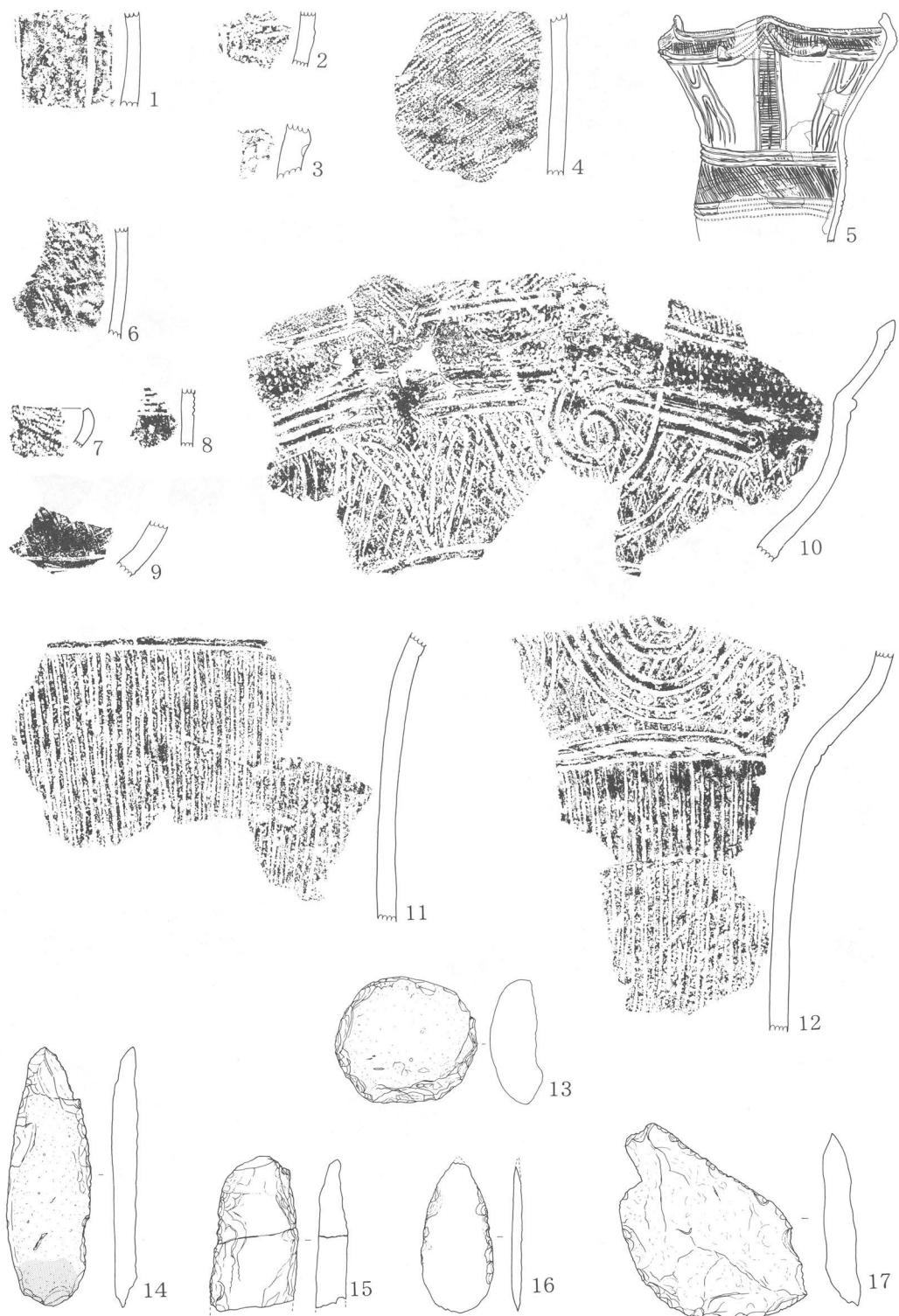
第22図 小豎穴址出土遺物 ($S = 1 : 3$)



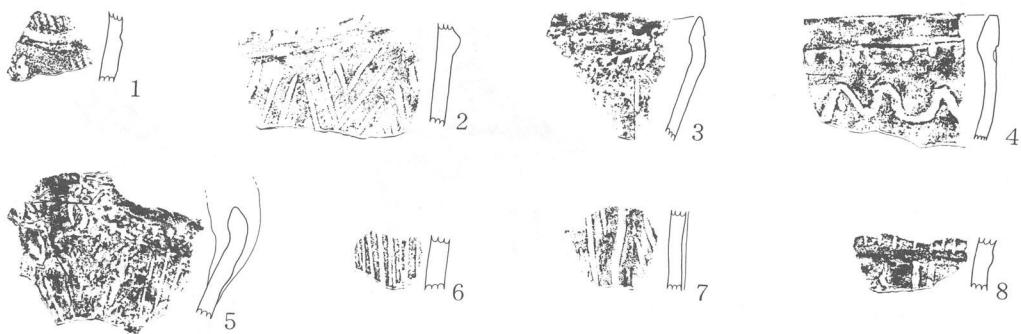
第23図 土壌1出土遺物 ($S = 1 : 3$)



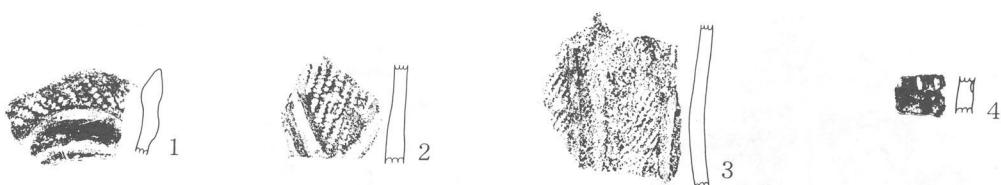
第24図 繩文時代早期末～前期初頭土器 ($S = 1 : 3$) 左拓影は裏面



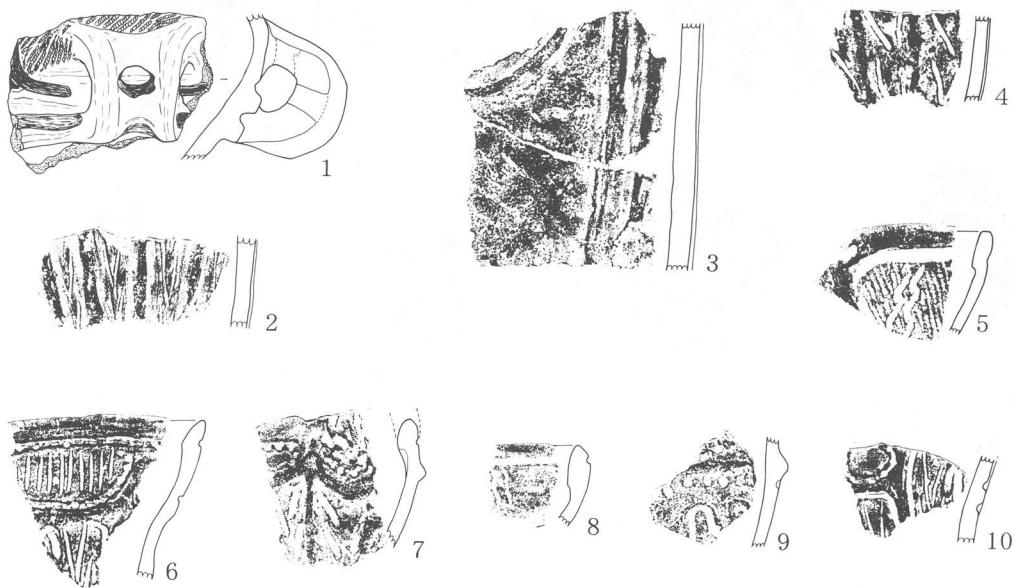
第25図 土壌4・6出土遺物 (5のみS=1:6) 1~3土壌4、4~17土壌6出土



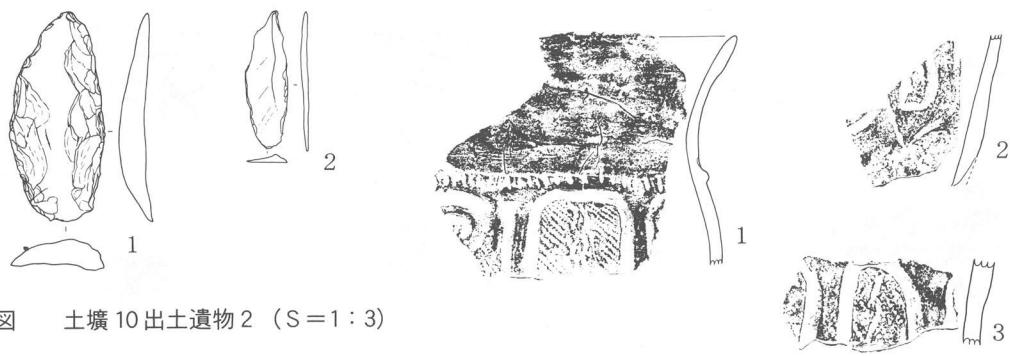
第26図 土壌8出土遺物 ($S = 1 : 3$)



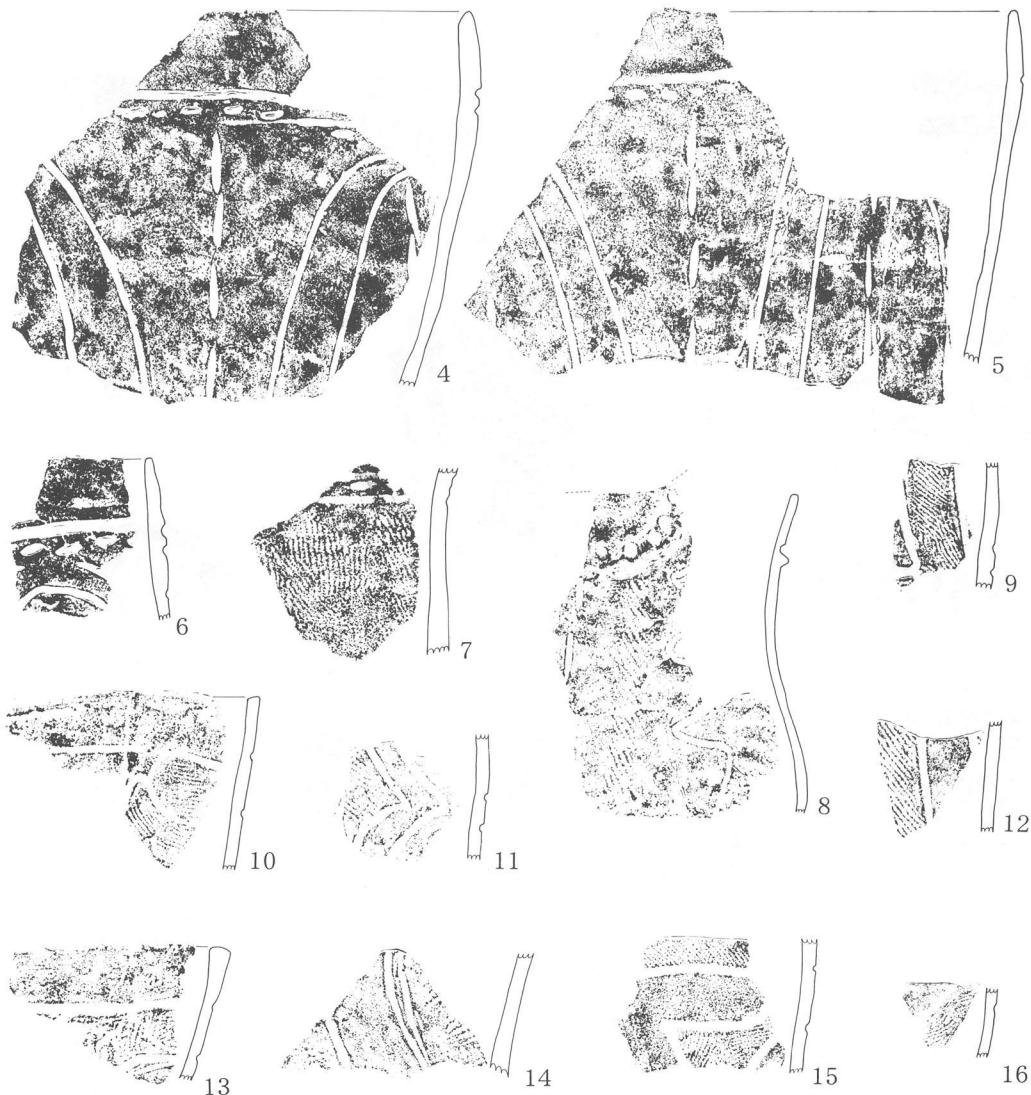
第27図 土壌9出土遺物 ($S = 1 : 3$)



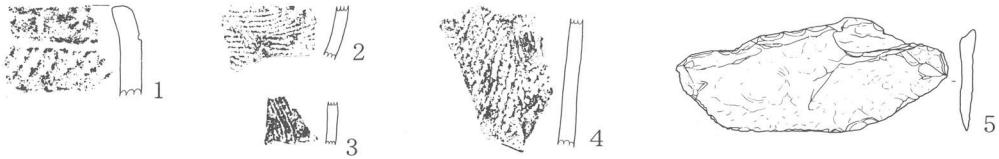
第28図 土壌10出土遺物 ($S = 1 : 3$)



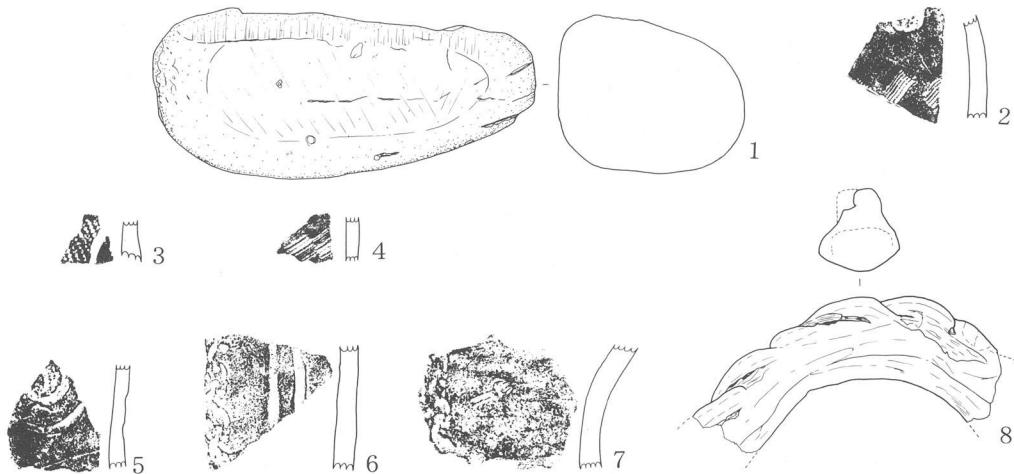
第29図 土壌 10 出土遺物 2 ($S = 1 : 3$)



第30図 土壌 11 出土遺物 1 ($S = 1 : 3$)

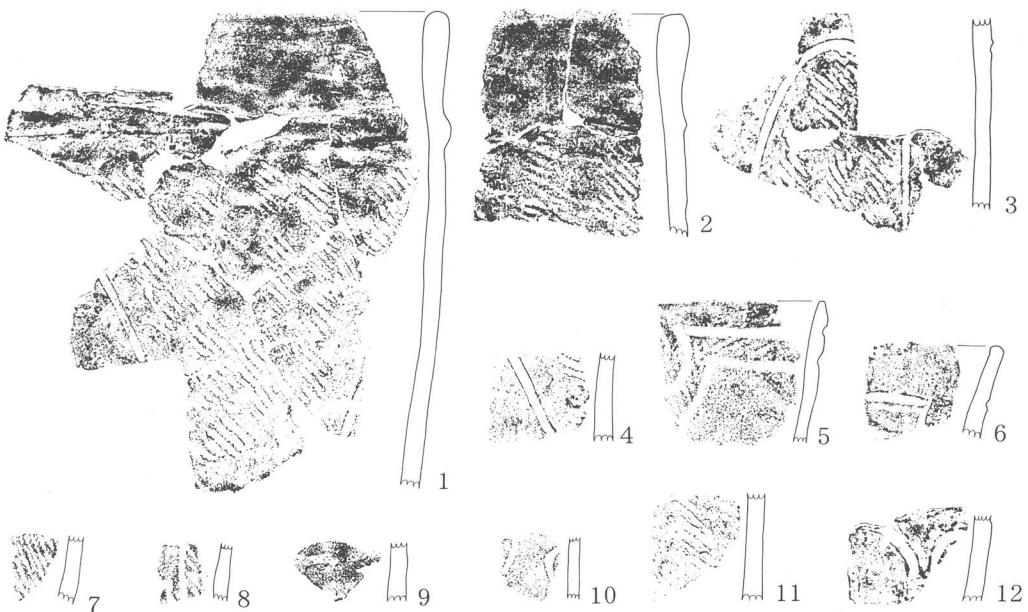


第31図 土壌 11 出土遺物 2 ($S = 1 : 3$)

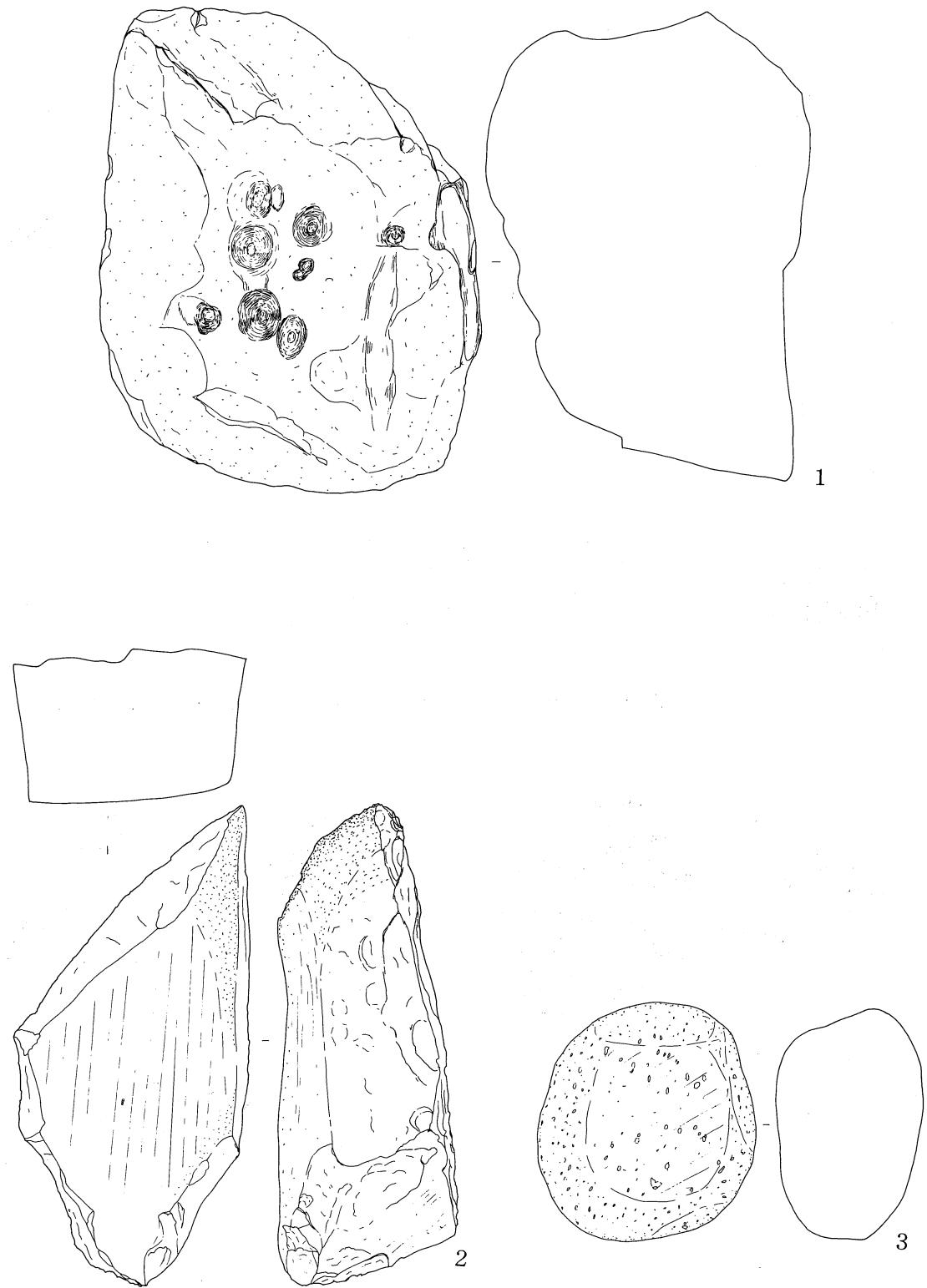


第32図 土壌 14~18 出土遺物 ($S = 1 : 3$)

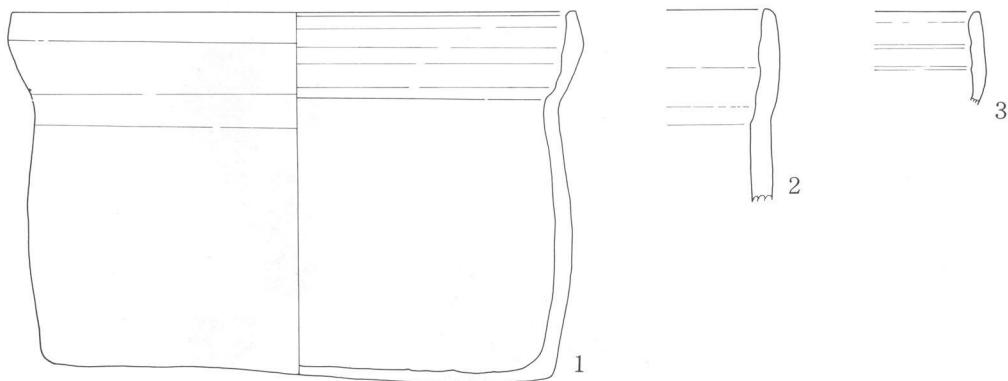
1・2は土壌14、3は土壌16、5~8は
土壌17、4は土壌18出土



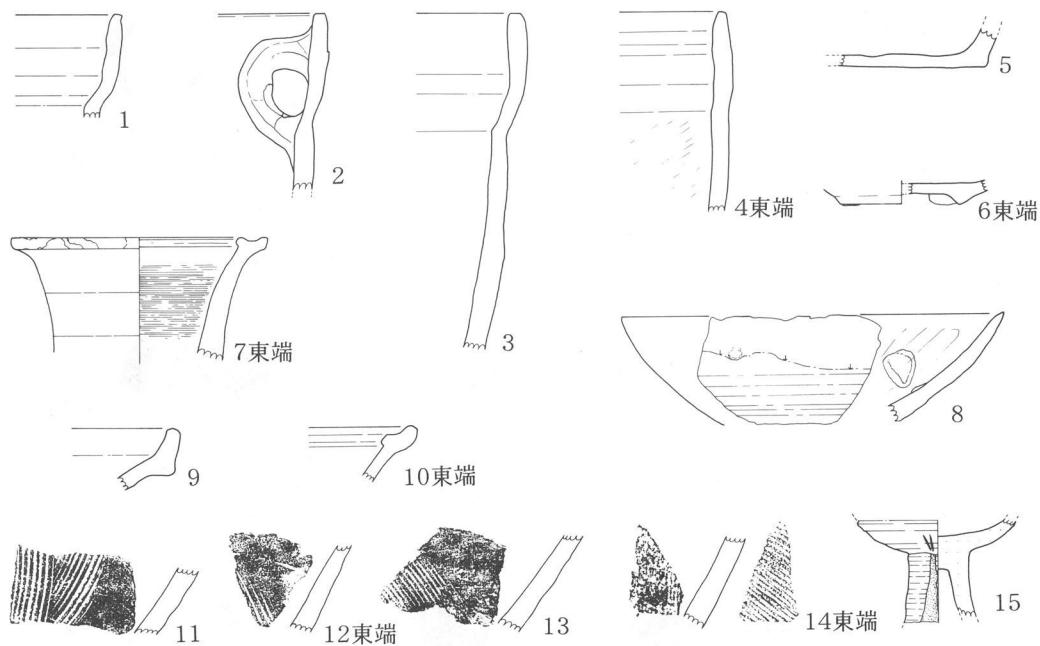
第33図 土壌 19 出土遺物 ($S = 1 : 3$)



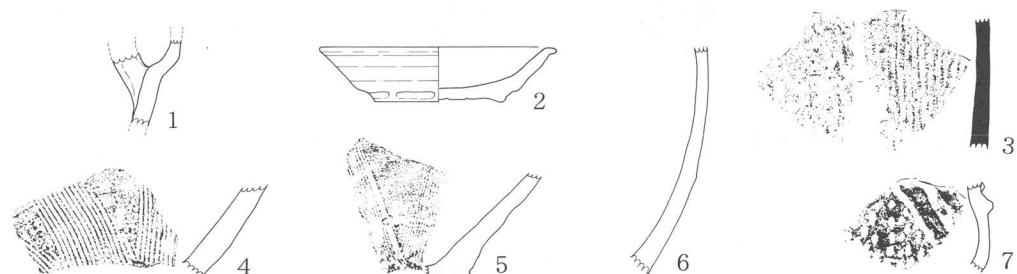
第34図 土壌出土大型石器 ($S = 1 : 3$)



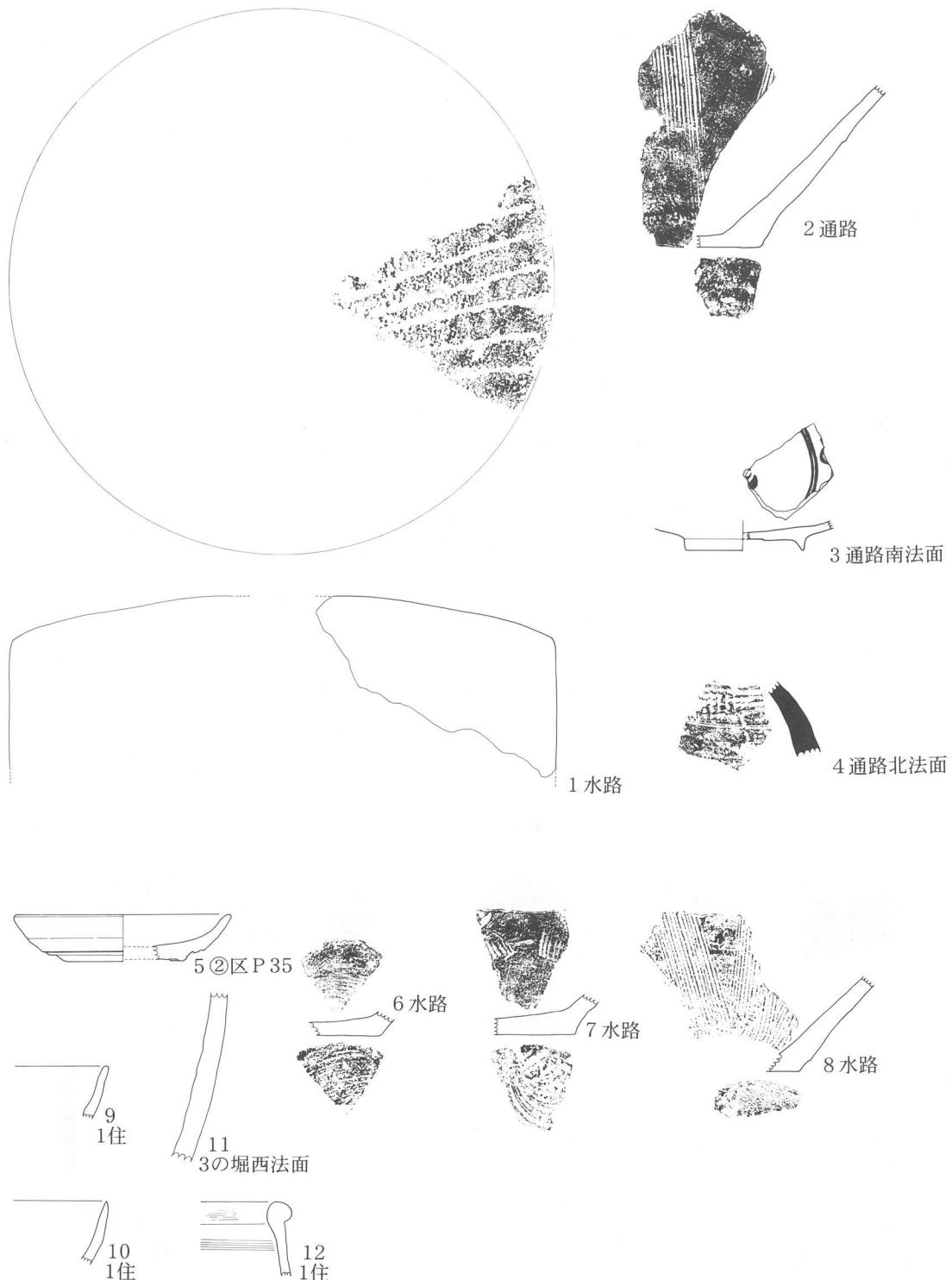
第35図 3の堀出土遺物 ($S = 1:3$)



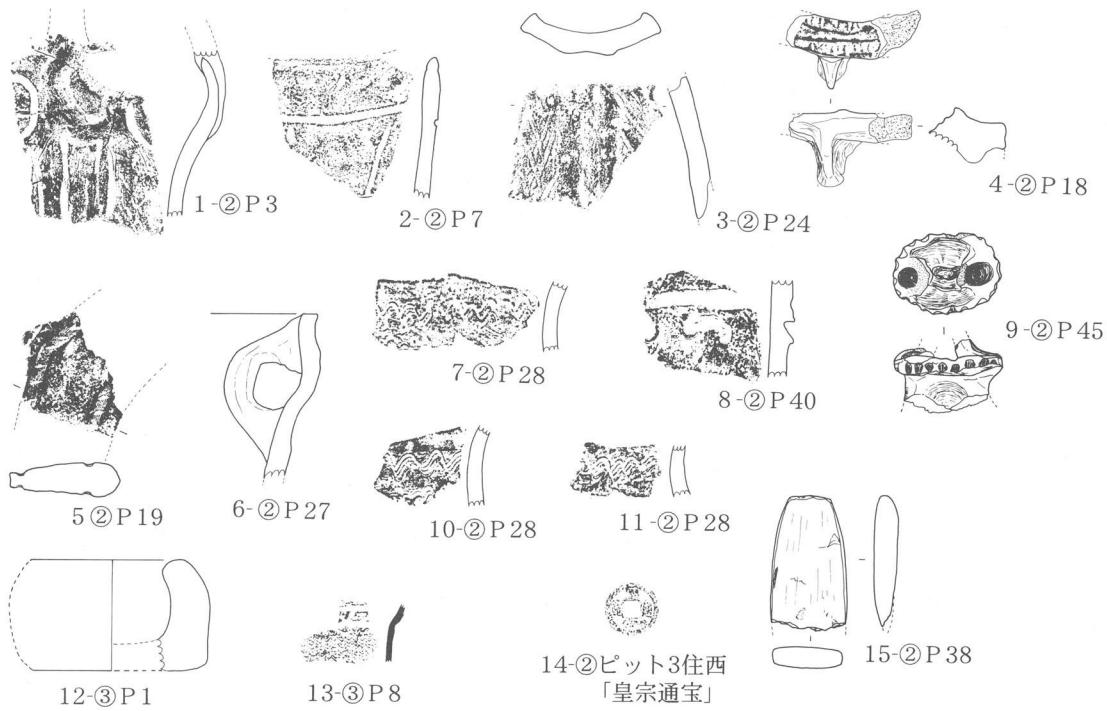
第36図 通路部溝出土遺物 ($S = 1:3$)



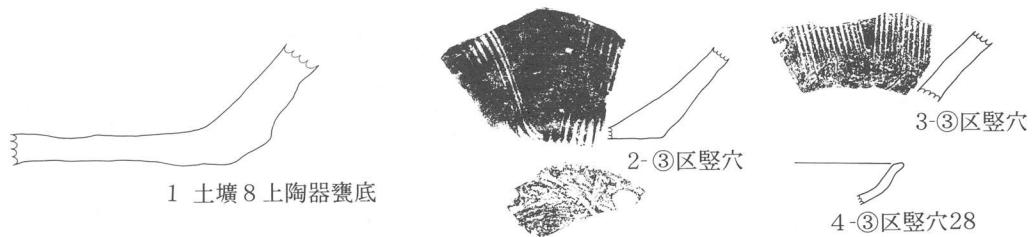
第37図 通路部石積み出土遺物 ($S = 1:3$)



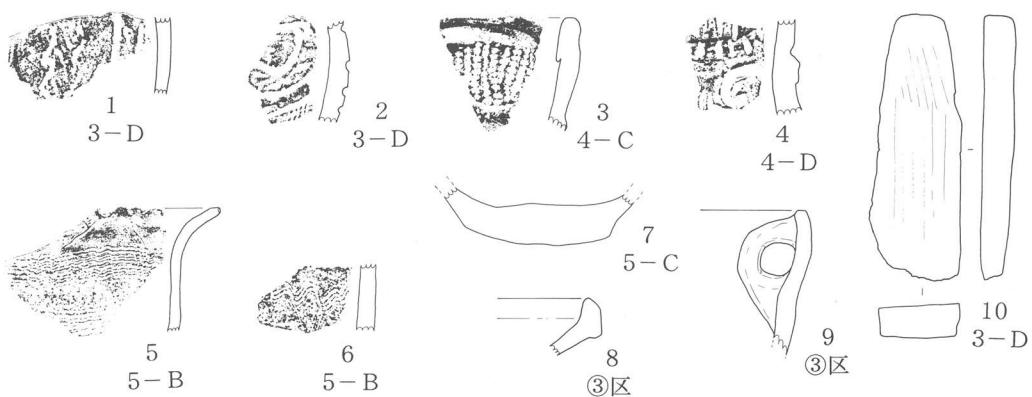
第38図 通路部水路その他出土遺物 ($S = 1 : 3$)



第39図 ピット出土遺物 ($S = 1 : 3$)



第40図 土壌8上層・③区竪穴出土遺物 ($S = 1 : 3$)



第41図 グリッド等出土遺物 ($S = 1 : 3$)



1. 遺跡遠景（ふるさとの丘より東から、中央白い屋根の向う）



2. 遺跡遠景（天王川対岸北西から）



1. 2の堀東土塁付近（北から）



2. ②区調査前（東から）



3. 農道試掘トレンチ



4. 3の堀調査前（南から）



5. 伊那森神社北試堀（東から）



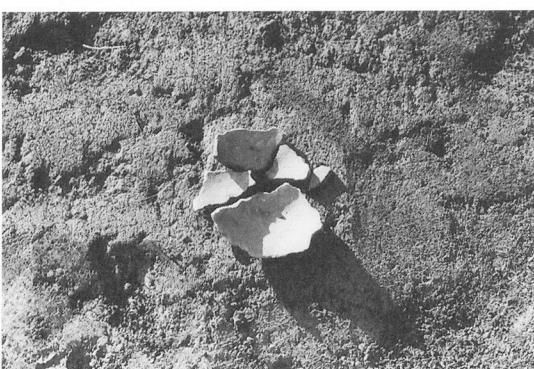
1. 第1号住居址（東から）



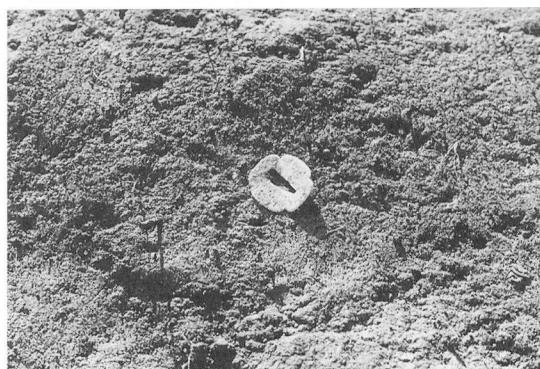
2. 1住炉付近土器と炭



3. 1住南東ピット（東から）



4. 1住覆土中高坏



5. 1住覆土中刀の鏃



1. 第2号住居址付近（西から）



2. 2住炉



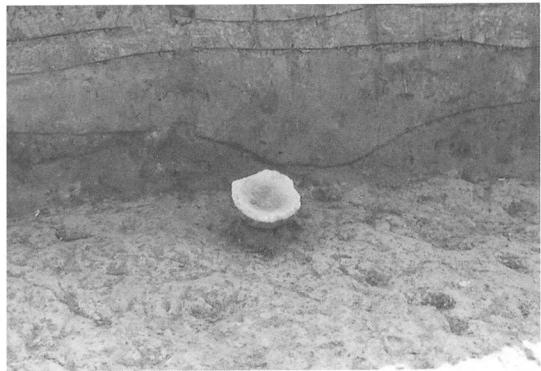
3. 2住炉焼土断面（南から）



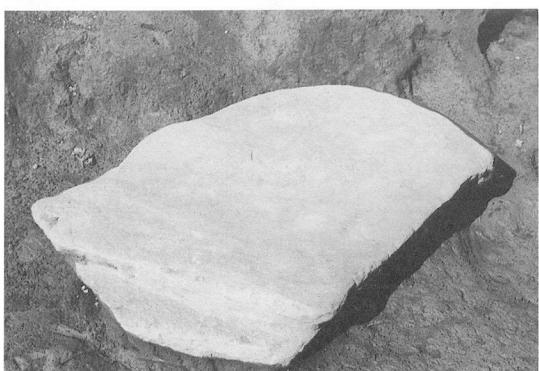
1. 第3号住居址（西から）



2. 3住東側土器



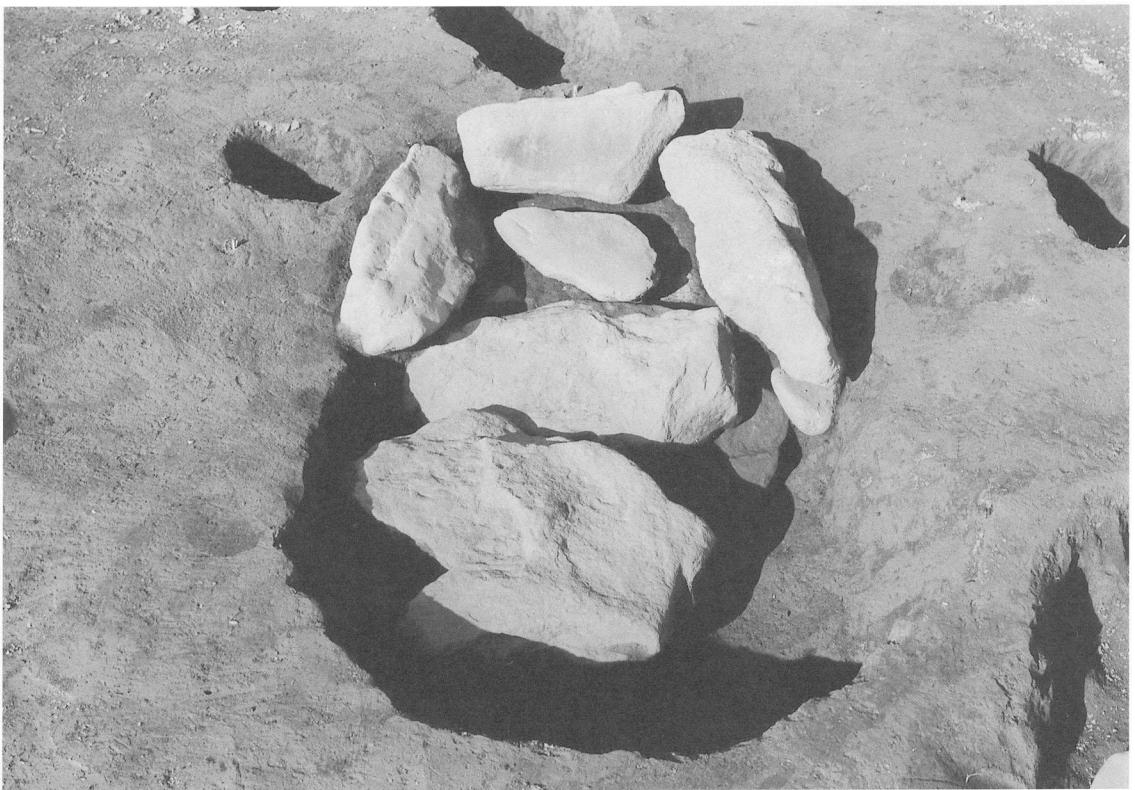
3. 3住中央付近土器底部（北から）



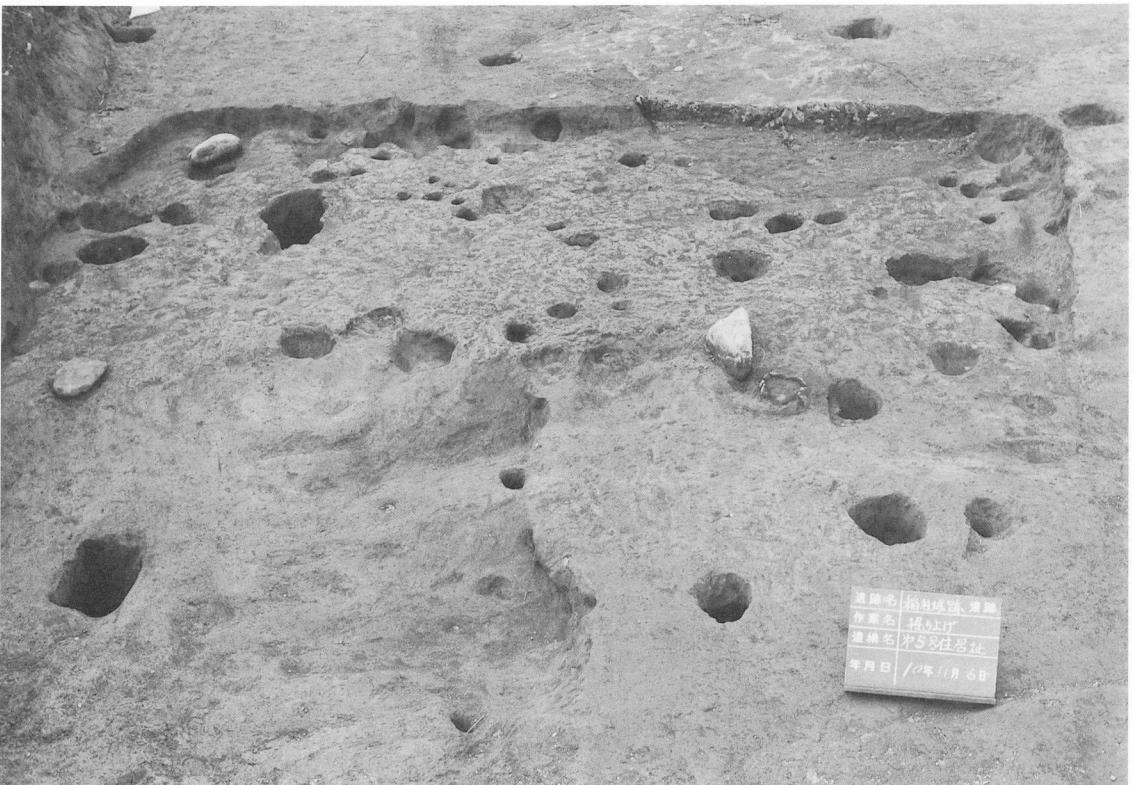
4. 3住台石（東から）



5. 3住床上出土粘土塊



1. 第4号住居炉址（東から）



2. 第5号住居址（東から）



1. 5 住埋甕炉



2. 5 住埋甕炉断面（東から）



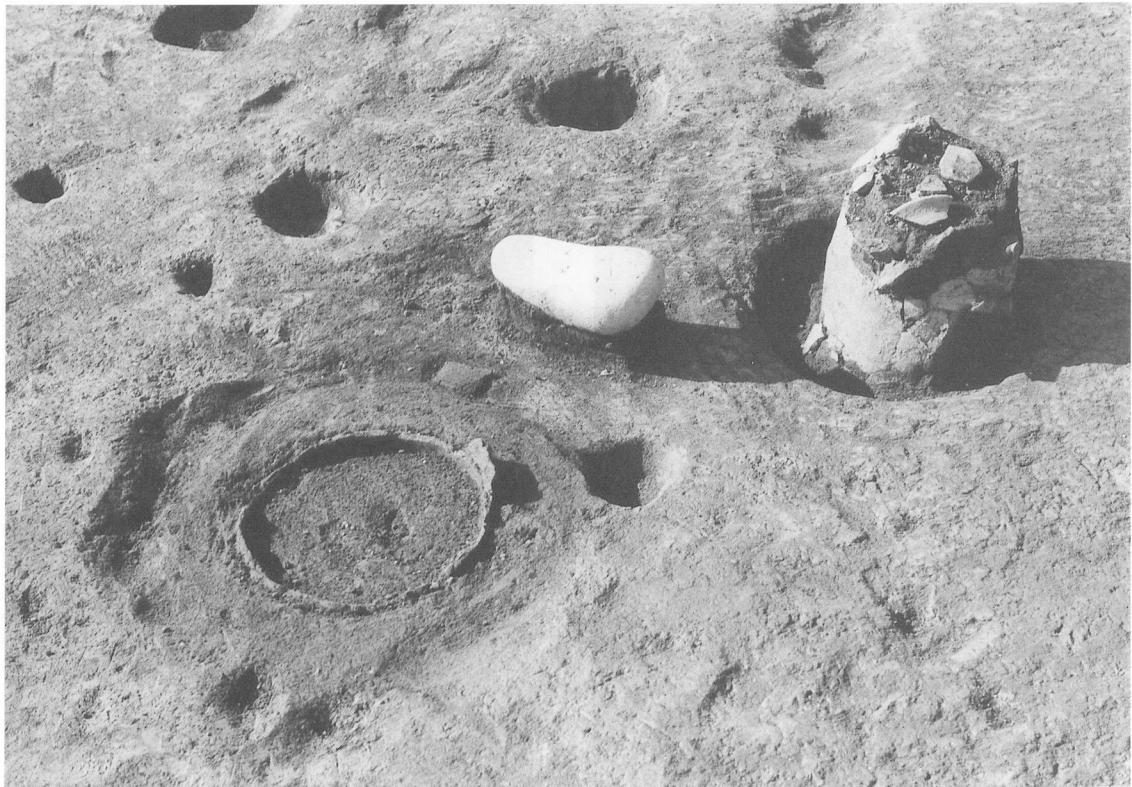
3. 5 住調査前（東から）



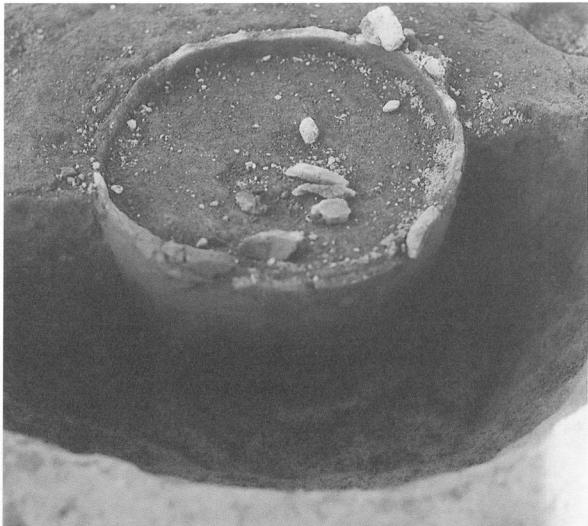
4. 6 住調査前（南東から）



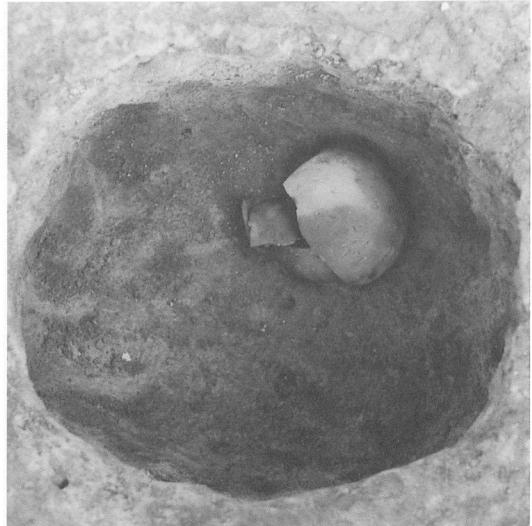
5. 第6号住居址（東から）



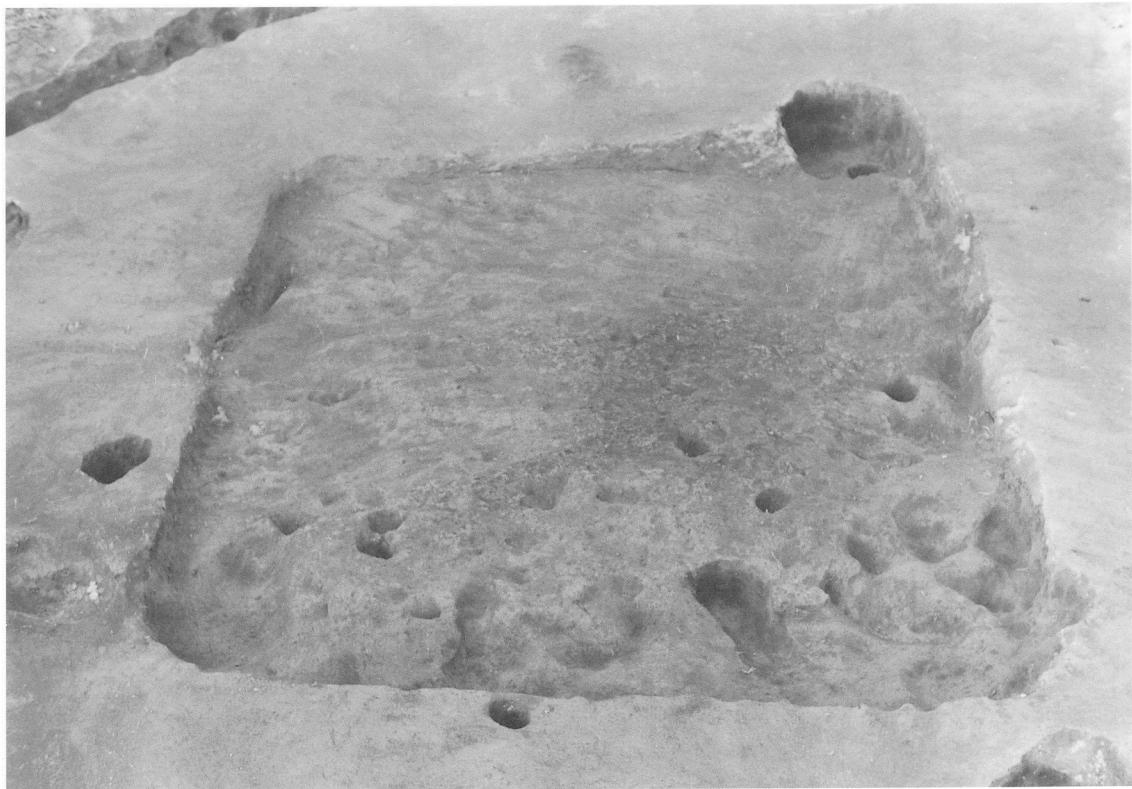
1. 6 住埋甕炉と覆土中土師器甕（東から）



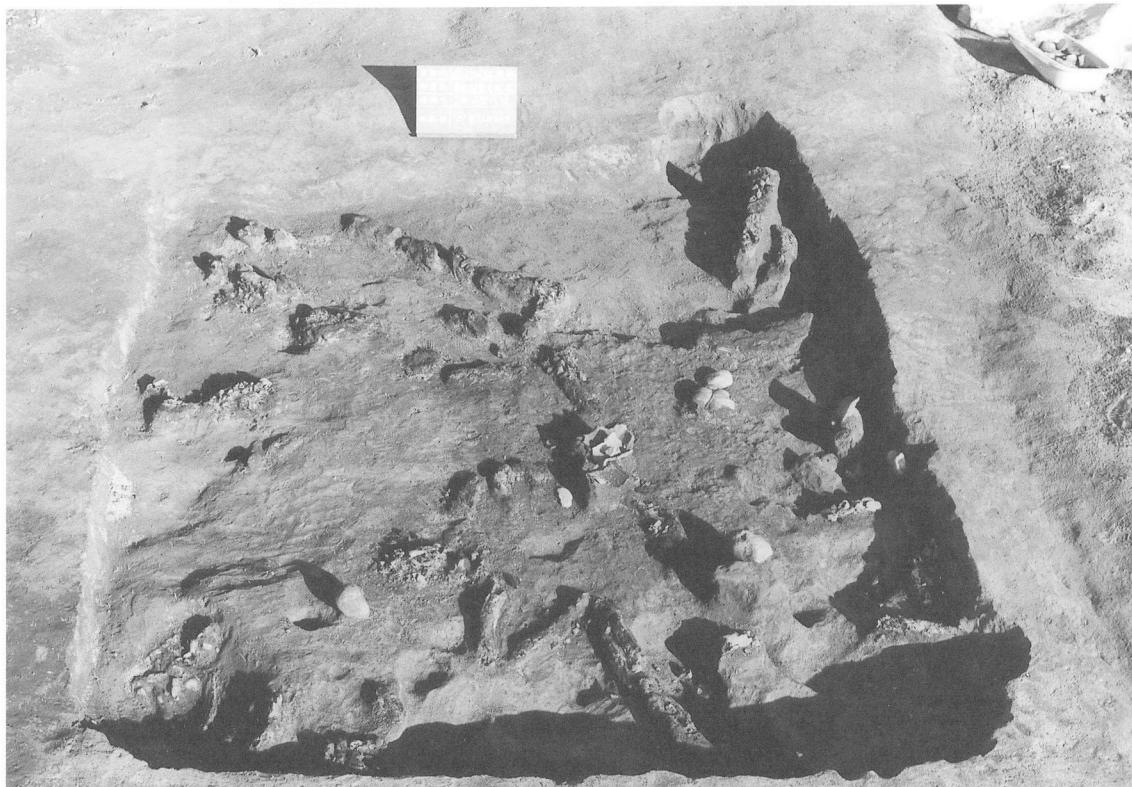
2. 6 住埋甕炉埋設状況（東から）



3. 6 住覆土中ピット底土師器坏



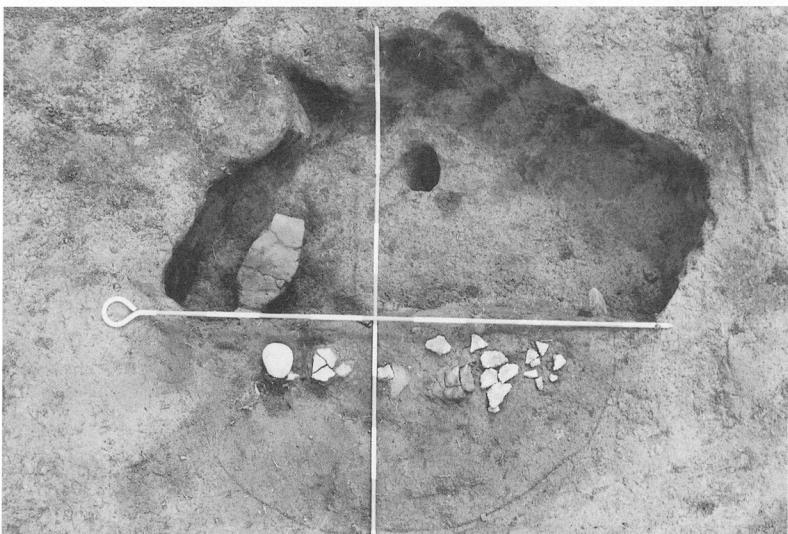
1. 小竪穴址（南から）



2. 小竪穴址炭化材（南から）



1. 土壙 1



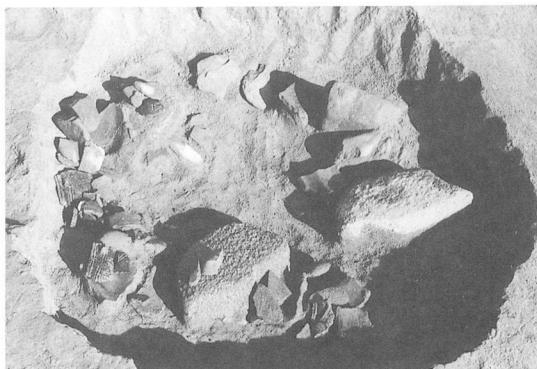
2. 土壙 1 土器



3. 土壙 1 覆土（南から）



1. 土壙 4・5 (北から)



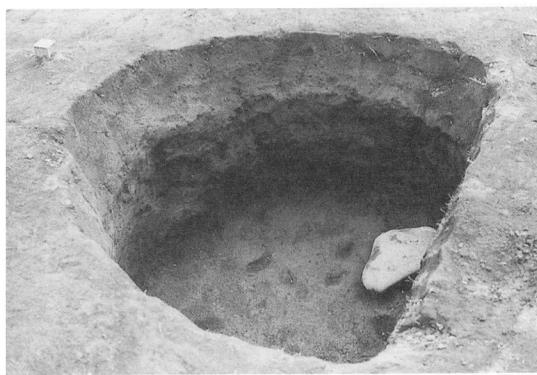
2. 土壙 6 (南から)



3. 土壙 8 陶器甕片 (北から)



4. 土壙10覆土中焼土



5. 土壙17 (南から)



6. 土壙19 (西から)



7. 土壙27 (北から)



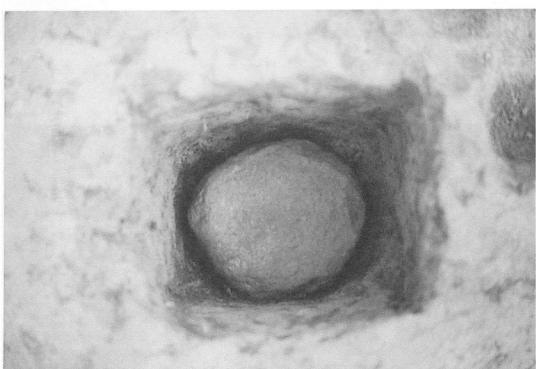
1. ②区東部ピット群（南東から）



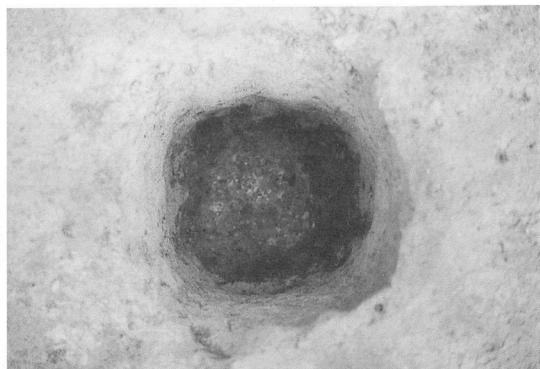
2. ②区中央部ピット群（南西から）



1. ②区西部ピット群（北東から）



2. ②区東部石の入る柱穴



3. ②区東部黒色土の入る柱穴



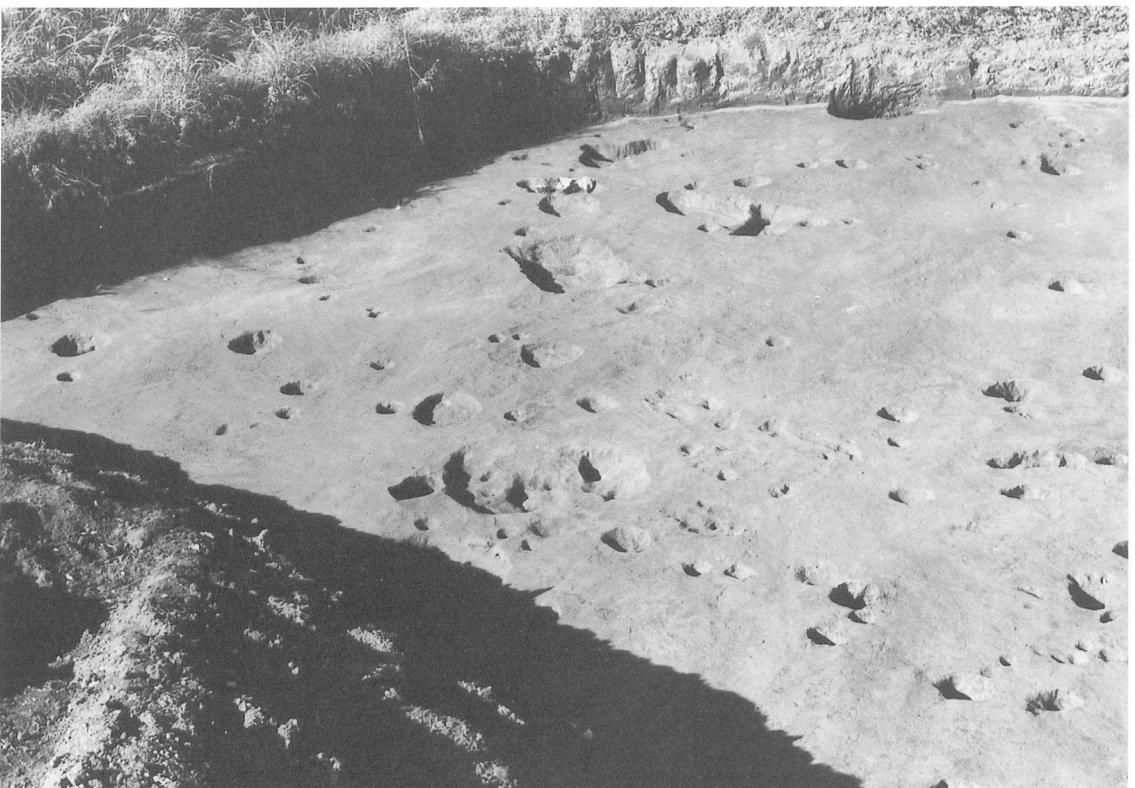
4. ②区西端小溝址（南から）



5. ②区南西隅落込み（北から）



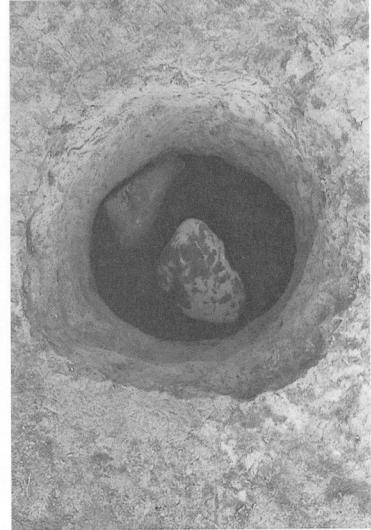
1. ③区（南西から）



2. ③区北部西半ピット群（南から）



1. ③区竪穴断面（南から）



2. ③区竪穴（上から）



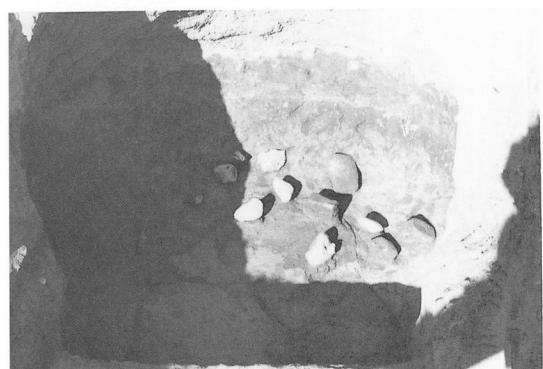
3. 竪穴下部覆土（南から）



4. 竪穴下部壁道具痕



5. 竪穴底陶器と炭（南から）



6. 竪穴中焼石



1. ③区竪穴覆土中炭



2. ③区焼土ピット（南から）



3. ③区特殊遺構（南から）